



瀬戸内国際芸術祭2016（小豆島、屋島、高松港近辺を巡る）

讃 樹 會

平成28年9月1日発行

CONTENTS

- 02 会長就任挨拶
- 03 同窓生教授就任挨拶
- 07 退官挨拶
- 08 新任教授就任挨拶
- 10 第14回讃樹會定期総会開催報告
- 14 新理事一覧
- 15 平成27年度会計報告
- 16 平成28年度予算及び組織図
- 17 理事会議事録
- 18 研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 20 熊本地震災害ボランティア体験記
- 22 特集“開業医だより”
- 30 国外留学助成金留学レポート
- 32 学生の短期留学報告
- 38 シリーズ創部ものがたり【ラグビー部】
- 40 「10年後の私」の10年後
- 42 支部会・懇親会【軽音部OB会】
- 46 Album
- 51 編集後記／事務局からのお知らせ
- 52 診療科だより

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
Tel/Fax 087-840-2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/

発行人 濱本龍七郎
編集人 安田 真之
印刷所 ㈱美巧社



会長就任挨拶



讃樹會会長

濱本龍七郎（昭和61年卒・第1期生）

初秋の候、会員の皆様におかれましては、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご厚誼にあずかり、厚く御礼申し上げます。

本年5月28日の第14回讃樹會定期総会をもって、第三代会長に就任した濱本龍七郎です。総会当日は、「コウノドリ」のモデルである萩田和秀先生（7期生）にお忙しい中、講師としてお越いただき、会場を埋め尽くす250名の聴講者のみなさんに熱く人生を語っていただけました。ご講演後は萩田和秀ピアノトリオのミニジャズライブへと続き、記念すべき日を盛りあげていただけましたことを、この場を借りて厚く感謝申し上げます。

さて、4月には仙台市の東北医科薬科大学（東北高校の横に位置します）が37年ぶりに承認され開講となり、全国の医学部は81校となりました。これも東北の医師不足解消という時代背景に対応するものと思います。更に来年には千葉県成田市に国際医療福祉大学が承認予定で、両校は旧帝大、官六、医専、新設医大に続き、新新設医大と言える流れなのでしょう。

讃樹會としては、正会員が3,000名近くとなり、今後益々の充実を図るため、この度、副会長に、平川栄一郎先生（昭和61年卒・香川県立保健医療大学教授）、大森浩二先生（昭和61年卒・りつりん病院副院長）、安岐康晴先生（平成3年大学院修了・香川大学地域医療再生医学講座客員教授）、中村文洋先生（平成7年卒・香川県立保健医療大学教授）、星川洋一先生（平成7年卒・香川県健康福祉部参事兼小豆島保健所所長）の5名に就任いただきました。執行部を盛り立てて御協力をお願いしたいと思っております。

取組みとしましては、これまで同様に、同窓会活動の根幹である、大学運営への協力、卒業臨床研修センターへの協力、同窓生のプロモーションへのサポート、同窓会事業の見直しと法人化に加え、讃樹會執行部の充実、大学執行部との両輪の更なる充実、看護科との連携の充実、そして全国各支部の充実に向け、広く意見を集約し、“施策の見える化”を目指したいと思っております。少しでも会員の皆様の支えとなれるよう、同窓生の母体組織として確固たる運営に当たりたいと存じます。

母校大学病院で働き、また、地域のために尽力されている同窓生、更に全国津々浦々で日々邁進されている同窓及び母校のため、母校教授の先生方の御意見も拝聴しながら、顧問に就任されました高橋則尋前会長のご協力のもと、新執行部及び新理事の皆様と力を合せて、我が我がの「が」を捨てて、お陰お陰の「げ」で生き、所々では一所懸命、長きに亘り一生懸命に生きる心算でございます。

昭和61年の創設から安定の30年を経て、今後は、讃樹會としての新しい展開を実現する時期に入ったと感じており、全力で職責を果たしたいと存じます。讃樹會の皆様にはますますのご理解、ご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

同窓生教授就任挨拶

本日天気晴朗なれども、、、波は高い？瀬戸内育ちなもので、、、

大東文化大学スポーツ健康科学部健康科学科 教授

後藤 孝也 (平成4年卒・第7期生)



この度縁があり、大東文化大学スポーツ健康科学部教授として着任し、新たに教育研究活動に努めています。大東大というと、正月の箱根駅伝で懸命に襷を繋ぐ走者を思い浮かべる方が多いと思います。もとは、大正12年に帝国議会の決議によって創設された学校に始まるという特殊な経緯があり、全国唯一の書道学科を持つ文系総合大学として歩んで来た大学です。その中で、私が所属する学部は、スポーツ分野や健康分野へ優秀な人材を輩出するべく研究教育活動を行う比較的新しい学部であり、中にはオリンピック出場選手もいますし、健康科学科では、臨床検査技師として、医療機関や各企業または公務員として活躍することを志す学生達が学んでいます。そのため、ほぼ全員が医師を志す医学科と異なり、同じ医療系とはいえ卒業後多方面での活躍を志す多様な学生に対しての指導が必要となり、悪戦苦闘の毎日を過ごしております。同時に自分の学生時代と比べて今の学生が随分様変わりしたことを実感しています。

私の学生時代は、まさに昭和から平成への時代の転換点でした。幸い、医学専門過程の前に大学生活を謳歌することが出来る2年間の教養課程が緩く残っていましたし、大学も黎明期で、初代砂田学長自らが新入生に医学概論を講義されていました。教授陣も手探りながら高い理想を語り、学生も懸命にそれに応えようとしていた時代だったのではないかと思います。また卒業後研修が義務化される前の牧歌的な時代で、卒業と同時に臨床研修と基礎研究の両方を体験する事が出来る良い時代だったと思います。そのため、いろいろと無理を聞いて頂き、大学院の研究を学外の研究所で共同研究としてやらせてもらいました。その期間に実施した癌遺伝子や癌抑制遺伝子の研究が、今の私の研究活動や医療の原点になっていると思います。それに比べて、今の学生は、学ばなければならない情報量が膨大になり、昔のようなのびのびとした学びの時間がとれないのが少々可哀想に思います。

一方、今の学生は所謂「ゆとり世代」です。かれらは、このように言われることを嫌っており、『自分達が悪いわけでは無い。』と言います。それはまさに正論で、彼らに責はありません。だからこそ、今の学生には、大学でもっと積極的に学び、広く海外への視野を持ち、海外で活躍して欲しい旨を折りに触れて伝えています。しかしなぜか今の学生は、内向的で、しかも国内指向が強いように感じます。少し前の学生は、海外留学希望者が多かったように思いますが、そのあたりも今の世代の気質なのでしょう。

私は、大学院修了後、機会を得て米国ボストンで研究活動を行いました。思い描いたような順風満帆の留学生活ではなく、難行苦行の留学生活でしたし、加え

て病気で生死の間を彷徨する羽目になり、ICUやオペ室、一般病棟、在宅医療など米国流医療のフルコースを患者として体験することになりましたが、結果として、留学生活で得たものは大きかったと思います。しかし私の経験を話すと、今の学生は留学を控えるので少々困った感があります。

私はこれまで海外を含め大学等を転々としてきましたが、運命的な出来事は、前任の放射線医学総合研究所へ異動することが決まり内示の辞令を受けた当日に東日本大震災が起きたことです。震災直後に起きた福島原子力発電所事故による放射線健康被害対策に関して、放医研は中心的立場で活動を行いました。当時、行政機関の医療班で活動する放医研から派遣することができた医師は、私を含めわずか3名でした。情報が錯綜し緊迫した日々変化する状況と、その都度迫られる判断など緊張に張りつめた時間を体験したこと、環境省環境保健部へ出向し、行政の立場でのいろいろな経験など、運命の不思議さを感じながら時を過ごしました。そんな経験があって今の私があると思っています。放医研に異動していなかったら、今の自分とは違った現在があるかも知れないと思うことはありますが、これも何かの縁なのでしょう。

いま、日本の医療は技術的にも、制度的にも激動の波に曝されています。気を緩めると、その波に押し流されたりする事になりかねないと感じます。しかし、自分のあり方は自分自身で決め、流れに抗いそして自らが切り開いていくことでしか得られないと思います。私の学生には、その事を含め些細な事で折れない強い心を鍛えることが、医療や教科の学習より重要だということをお伝えしているつもりですが、学生はどう受け止めているのでしょうか。

今年の箱根駅伝では、本学学生の努力及ばず大学はシード落ちでした。来年の箱根駅伝では、出場権を獲得しシード復活、願わくは、優勝という活躍を期待したいのですが、そう簡単にいかないかもしれません。何事も一歩一歩が大切です。私の研究室は大海へ漕ぎ出した木の葉のような小舟でしかありません。『本日天気晴朗なれども波高し』そうありたいと努力しております。今後ともご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

略歴

香川医科大学医学部医学科卒、医学研究科修了。香川医科大学助手、米国タフツ大学医学部留学。帰国後、愛媛大学医学部助手、東京大学医科学研究所教員、自治医科大学医学部講師、放射線医学総合研究所主任研究員、環境省環境保健部参事官補佐を経て、平成27年4月より大東文化大学スポーツ健康科学部教授。

同窓生教授就任挨拶

「教授就任にあたって」

～今できるベストを尽くそう～ ～点と線～

杏林大学保健学部救急救命学科 教授

山田 賢治（昭和63年卒・第3期生）



平成28年4月1日付けで、杏林大学保健学部救急救命学科教授に就任致しました。讃樹会会員の先生方にご挨拶を申し上げますとともに、これまでご指導を賜りました先生方に心より感謝を申し上げます。

私は香川医科大学3期生として入学し、硬式テニス部に所属して朝から晩まで部活動に明け暮れる学生時代を過ごしました。大学から始めた初心者でしたが、先輩、同級生、後輩に恵まれ、卒業まで頑張ることが出来ました。学生時代に培った体力と精神力がその後の自分を支えてくれた気が致します。

大学卒業後、上野良三先生が教授でいらっしゃる整形外科科学教室に入局致しました。当時は助教授に多田浩一先生、講師に岡田孝三先生がいらっしゃる、病棟医時代には、医療の担い手として患者さんに向かい合う際の心構えを厳しくご指導頂きました。大学院時代には、西川克三先生が教授でいらした金沢医科大学第二生化学教室で医学研究科聴講生として、2年間勉強させて頂く機会を頂きました。吉川佳乃先生には研究の一からご指導を頂き、当時最先端であった成長因子の研究に携わることが出来ました。この時代に特に記憶に残っているお話を2つご紹介させていただきます。

～今できるベストを尽くそう～

交通外傷による多発外傷のため高齢の患者さんが夜間に救急外来に搬送され、下腿の開放骨折を合併していたため、研修医の自分と上席の当直医がコールを受けました。多田助教授を筆頭に手術室のロッカールームに集合したスタッフ間で、開放骨折の治療方針を巡りディスカッションが始まりました。疲労の色が濃い深夜2時頃だったと記憶しています。救命出来たものの予後は予断を許さない状態でした。当初は侵襲を考慮して開放創の洗浄・デブリに留め、シーネ固定で経過をみる方針が良いのではという意見が優勢でした。創外固定は手術時間が多少余分にかかり、装着してもすぐに外すことになりかねないと費用対効果の話も出ました。骨折型からみて骨折部はかなり不安定だから、シーネ固定では体位変換など集中治療室での管理が逆にしにくいだろう、全身管理を考えればやはり創外固定。「今考えられるベストの治療をやろう」「中途半端なことをする位なら0点とかわらへん。どうせなら100点目指そうや。」と、やがて全員が納得し時間を短縮するため気合を入れて手術に臨みました。先輩方のプロフェッショナルとして「ベストを尽くす」ことへのプライドと情熱を、その瞬間垣間見た気が致しました。このときに頂いた言葉を、私の「座右の銘」として今も忘れないように心掛けています。

～点と線～

大学院では研究に没頭する日々を過ごしました。その当時は、学会発表、論文投稿を含めて、作図は縦軸・横軸の目盛り、表題、点、線に至るまですべて製

図道具を用いて「手書き」で作成していました。実験で得られたデータを見ながら、慎重に点を図に記入していきます。作図していたあるとき、背後から声をかけられました。「点」はね、結果。変えられない事実なのだよ。」「点と点を結ぶ「線」をどう図で引くかは自由、科学者の考え、'仮設'だから。それが大事。」とご指導頂きました。実験結果を図にして報告しますと「この線、本当かな？」と、もう一回、この条件を少し変えてもう一回と、同じ実験を何度も何度も繰り返すご指導を頂き、なかなかデータを発表させて頂く許可を頂けませんでした。「一度世に発表したデータは、例え故意でなくても間違っていると取り返しがつかないのだよ」と。「研究室の信用に関わるから、100%の確信をもってないと出さない」とよくおっしゃっていました。当時の私は、そこまで100%にこだわらなくても…という気持ちも少し持っておりましたが、昨今の研究倫理の話題を耳に致します度に、自分は良いご指導を頂いて幸運だったと頭が下がる思いが致します。日の目をみなかった数多くの実験データ、それが私の学位論文を支えてくれていると思います。

その後医師10年目にして一念発起し進路変更も致しましたが、これまで師に恵まれ、先輩・同僚・後輩やチームスタッフに恵まれ、患者さんに恵まれ、非常に沢山のことを教えて頂き、また自ら学ぶことが出来ました。出会えた素晴らしい諸先輩方はお手本となって、今なお私の自己研鑽への意欲を高めて下さっています。

この度の新たな職場では、これまでの経験を糧として、学生たちと共に学び、私が学んだことや教えて頂いたことを伝えながら、社会に出て立派に活躍できるように、単立つ時まで学生たちの学びの伴走者たれるよう努力して参りたいと考えています。また大学人として、念願でございました医学研究につきましても、注力したいと決意を新たにしております。

大変微力ではございますが、香川医科大学卒業生の名に恥じぬよう、精一杯努力していく所存でございますので、なにとぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略歴

昭和63年3月	香川医科大学医学部卒業
平成4年3月	香川医科大学大学院 医学研究科修了
平成4年4月	香川医科大学附属病院 整形外科科学医員
平成9年9月	香川医科大学附属病院 整形外科科学助手
平成11年7月	杏林大学医学部 救急医学助手
平成16年5月	赤心堂病院 整形外科医長
平成18年4月	杏林大学医学部 救急医学講師/臓器・組織移植センター 副センター長
平成23年4月	同准教授
平成28年4月	杏林大学保健学部 救急救命学科教授

同窓生教授就任挨拶

香川から世界に発信できる医療人養成を目指して

香川県立保健医療大学保健医療学部臨床検査学科 教授

中村 文洋 (平成7年卒・第10期生)



香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、平成28年4月1日付けをもちまして香川県立保健医療大学保健医療学部臨床検査学科、臨床遺伝子検査学担当教授を拝命いたしました。まずは、ご指導を賜りました同窓会会員の皆様に、御礼申し上げます。また香川大学医学部在職中は公私にわたり格別のご厚情を賜り心より感謝申し上げます。

私は平成元年法政大学工学部土木工学科を卒業し、同年香川医科大学医学部医学科に第10期生として入学いたしました。平成7年卒業後、現香川大学学長であります長尾省吾先生が主宰されておりました脳神経外科教室に入局いたしました。臨床では当時の脳神経外科領域の最新の機器の研究、基礎では脳神経外科疾患の遺伝子的解析を開始しました。長尾先生のご配慮により、私が工学部出身であること、これからは遺伝子の時代になることを予見されて、配属していただきました。平成14年より2年間、米国ミシガン大学メディカルセンターでポスドク研究員として、「脳卒中におけるDNA損傷」をテーマに研究を行ってまいりました。帰国後は、香川大学医学部附属病院救命救急センターで勤務後、平成18年より元香川大学理事であられました板野俊文先生が当時主宰されておりました脳神経生物学教室で教育・研究を行うことになりました。教育では、医学部での学部・大学院教育だけでなく、教育の新しい試みとして「文系学生のための自然科学実習」の開発、「地域医療における多職種連携のための研修」の開発など様々な機会をいただきました。研究では、他の教室との共同研究に重きを置き、引き続き遺伝子損傷の解析を行ってまいりました。また、工学部土木工学科出身であることから、香川大学危機管理研究センターの委員として南海トラフ地震対策に関しても携わる機会をいただきました。このような経歴から、現職の臨床検査学科そして遺伝子担当を拝命したことは、大変ありがたく思っております。本学も地域連携や防災に関しても重視しており、私の経験が少しでも役に立てればと思っております。

香川県立保健医療大学臨床検査学科は、臨床検査技師養成施設としては大変古くからの歴史があります。昭和33年に初めて検査技師に関する法律である衛生検査技師法が施行され、同年に香川県衛生検査技師養成所が開校されました。その後、昭和50年に香川県臨床検査専門学校となり、平成11年に香川県立医療短期大学、平成16年に香川県立保健医療大学として開校、平成21年に大学院が設置されております。歴史はありますが、4年制公立大学としては最も新しい大学となります。公立大学84校中、独立法人化していない16校に含まれます。本学は香川県直営であり、県の意気込みが感じられます。

このように、歴史もあり新しくもあり、そして発展を続けている環境で、教育および研究ができることを

大変うれしく思っております。近年、医療における社会問題が取り上げられております。また医療のグローバルスタンダード化が求められております。真の心をもち香川から世界に発信できる医療人の養成に努めて参りたいと存じます。「仕事は地元香川で、専門の研究はインターナショナルで」を合言葉に学生とともに大学の発展に寄与したいと思っております。

私と同窓会とのかかわりですが、平成7年3月の卒業式の時に会長の濱本龍七郎先生から、当時学年代表していた私のところにお越しいただいて、ご挨拶いただいたのが最初になります。その後、平成14年度同窓会国外留学助成金をいただき、帰国後に平成18年度から平成23年度まで同窓会学年理事を担当させていただきました。平成24年度から平成27年度まで同窓会執行部広報局長として会報発行などのお手伝いをさせていただきました。同窓会会報を第44号から第51号まで担当させていただきました。第50号記念号で会報の歴史に関して執筆させていただきました。そして今回は第52号で再び執筆の機会をいただき本当に感無量でございます。これまで会員の皆様から多くのご支援をいただき、何とか役割を務めあげることができました。会員の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。今後は、違う形で同窓会に少しでもお手伝いができればと考えております。

以上のように、会員の皆様をはじめ、多くの方々の支援により、今があると実感しております。非才の身ではございますが 専心職務に精進いたす決意でございます。同窓会会員の皆様には、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら 会員の皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

香川県立保健医療大学 保健医療学部 臨床検査学科
〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1
TEL: 087-870-1212, FAX: 087-870-1202
E-mail: nakamura@chs.pref.kagawa.jp

略歴

平成元年	法政大学工学部土木工学科卒業
平成7年	香川医科大学医学部医学科卒業
平成11年	香川医科大学大学院医学研究科修了
平成11年	JA香川県厚生連 滝宮総合病院 医員
平成12年	香川医科大学医学部附属病院 医員
平成14年	米国ミシガン大学メディカルセンターポスドク研究員
平成16年	国立大学法人香川大学研究生
平成17年	国立大学法人香川大学医学部附属病院 医員
平成18年	国立大学法人香川大学医学部 助手
平成19年	国立大学法人香川大学医学部 講師
平成21年	国立大学法人香川大学医学部 准教授
平成28年	現職

同窓生教授就任挨拶

第二世代として

香川大学医学部同窓の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、平成28年4月1日付けで、愛知医科大学・解剖学講座・教授を拝命いたしました。

私は、平成8年に入学し、サッカー部に所属していました。サッカーはお世辞にも上手だったとはいえませんが、素晴らしい先輩・同級生・後輩に恵まれ、密度の濃い、刺激的な生活を讃岐丘で送りました。大学4年次、練習中に膝を怪我したことをきっかけに、生理学講座・徳田雅明教授（現副学長）の研究室へ通いました。そして、6年次には徳田教授の紹介で、短期留学生としてカルガリー大学で学ぶ機会をいただきました。その際に、未知の分野を開拓する研究の面白さに触れ、基礎医学の道へ進むことを決めました。現在への道標を与えて下さった徳田教授に、心より感謝しております。

私が大学を卒業する年に、解剖学講座・伊藤正裕先生が東京医科大学の教授に就任されることが決まりました。伊藤教授は私が学生時代に解剖学を教わった恩師でもあり、サッカー部の先輩でもあります。私が学生時代には、卒業生の教授は大学におられず、憧れの存在でした。中部労災病院で初期臨床研修を終えた後、基礎医学への第一歩を東京医科大学・人体構造学講座・伊藤正裕教授の下で歩むことにし、医学教育・研究に従事しました。

私に与えられた研究テーマは、「生殖と免疫の連関」でした。マウスを用いて免疫病理学の視点から実験を進めるうち、生体の解析を行うための基盤は「解剖学＝形態学」にあることを学びました。形態が有るところには機能が宿り、マクロからミクロまでの構造（器官系－臓器－組織－細胞－細胞内小器官－分子）がそれぞれに機能して初めて、生体のシステムが成り立ちます。このような生命の基盤を扱う解剖分野の特性を背景に、積極的に他分野との連携を進め、マウスだけでなく多様な実験動物を用いた幅広い分野で研究を行ってきました。

生命の原点に触れる基礎研究は、人類の未来を大きく変える可能性がある、魅力的な仕事と考えています。今後も形態学を軸とし、幅広い分野において社会に還

愛知医科大学解剖学講座 教授

内藤 宗和（平成14年卒・第17期生）



元できる研究を続けていくとともに、将来を担う若手基礎研究者の育成にも力を入れていきたいと思っています。

徳田雅明教授は開学当初から香川大学におられた、いわば0期生で、師匠の伊藤正裕教授は香川大学医学部の2期生です。17期生の私は、彼ら第一世代に教える請うた第二世代となります。第二世代は抗生物質や携帯電話においても、未来に広がる大切な役割を果たしてきました。私は第二世代の筆頭として、誠心誠意、自分に与えられた仕事に向き合うとともに、基礎医学の魅力の後進に伝えられるよう、私自身も楽しみながら、研究に励んでいきたいと思っています。愛知医科大学は名古屋の中心部からやや離れますが、自然豊かな環境に位置しています。お近くに来られる際には、どうかお立ち寄りください。

略歴

平成7年3月	愛知県立 刈谷高等学校	卒業
平成7年4月	大阪大学 工学部 精密工学科	入学
平成8年4月	香川大学 医学部 医学科	入学
平成14年3月	香川大学 医学部 医学科	卒業
平成14年5月	中部労災病院	臨床研修医
平成18年3月	東京医科大学	人体構造学講座 助教
平成22年1月	東京医科大学	人体構造学講座 講師
平成23年9月	ブエノスアイレス大学 医学部	組織細胞生物学講座 Research fellowとして留学
平成26年5月	愛知医科大学	解剖学講座 准教授
平成28年4月	愛知医科大学	解剖学講座 教授

退官挨拶

－香川医科大学・香川大学での16年を振り返って－



医療法人郁慈会法人本部副理事長
日本ハム株式会社本社産業医（兼務）

河野 雅和

平成12年4月1日より香川医科大学内科学第二講座を担当することとなり、平成28年3月31日をもって香川大学を退官致しました。

退官にあたって長尾省吾香川大学長より表彰状と名誉教授授与、また医局よりは教授退官のクリスタルの盾を頂きました（写真1）。

退官記念祝賀会は教室員3名が2015年4月付で香川大学医学部総合内科教授、香川大学医学部地域医療再生医学講座（2名）に就任したため就任式と同時にJRホテルクレメント高松にて2015年末に執り行いました。祝賀会では東京医科歯科大学名誉教授・先端医療振興財団先端医療センター病院長の平田結喜緒先生に再生医療についての記念講演をして頂き、またViolinistの松川暉様をロンドンから招聘し、Pianistの鈴木華重子様、Entertainerまねだ聖子様をそれぞれ京都、東京から招聘し盛大な会となりました。



写真1

この16年は「光陰矢の如し」の諺通り瞬く間に過ぎました。特にこの間に独法化と診療科再編に伴って香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科学 (Department of CardioRenal and CerebroVascular Medicine) となり、また平成26年よりは新病棟3階にCCU併設の心臓血管センターも開設され正に激動の16年でありました。

人事の面では、教授職5名（6名達成）、循環器内科部長5名、腎臓内科部長5名、病院長・副院長5名との数値目標を早々と達成し、突破致しました。

研究面ではインパクトファクター1000点（前大学の1Fを含めて）を目標としてきましたが退官時には1500点に到達致しました。現在は医療法人本部副理事長の立場で経営の安定化、財務の健全化、地域医療の質の向上などを、日本ハム株式会社本社産業医の立場では予防医学と職場環境の改善に取り組んでおり、香川大学での副院長経験や診療経験が大いに役立ち深く感謝しております。

教室主任として16年勤め上げることができたのは多くの医局員の協力、先輩の御指導・御鞭撻によるところが大きいです。

同窓同門の諸先輩方におかれましては、今後とも心臓血管センターをはじめ、循環器内科 (Division of Cardiology)、腎臓内科 (Division of Nephrology and Hemodialysis)、血管内科 (Division of Anti-aging and Vascular Medicine) 教室のご支援ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

筆を擱くに当り、16年にわたり賜りました御指導・御鞭撻・御厚誼にこの場を借りて御礼申し上げます。

教室の若い先生方へのメッセージ

I want to encourage young doctors of our department to have "Big Dreams" and keep pursuing them.

Your dreams will surely do come true someday !

Masakazu Kohno, MD, PhD



新任教授就任挨拶

心・腎・脳連関により香川発の新しい医療を開発し、 地域・世界の患者に届ける

循環器・腎臓・脳卒中内科学
教授 南野 哲男



この度、香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科学教室を主宰することになりました。この場をお借りして、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の先生方に御挨拶申し上げます。当教室には、県下唯一の大学医学部附属病院・特定機能病院として、臨床・教育・研究の三つの分野に大きな役割があります。それぞれについて、当教室の特徴と展望をお話いたします。

臨床：「心腎脳専門医が一丸となり、地域の“最後の砦”としての役割を果たす」

虚血性心疾患、不整脈、心不全などの重症心疾患患者や緊急透析が必要な腎不全患者について、救命救急センターの先生方と一丸となって、循環器専門医・腎臓専門医が24時間体制で診療を行っております。今後、心・腎・脳専門医が一丸となって、香川地域の循環器系疾患に対する救急医療にさらに積極的に取り組み、地域の“最後の砦”としての役割を果たしてまいります。また、標準治療を丁寧に行い、それに加え、難治性循環器疾患や重症患者の治療に積極的に取り組んで参ります。さらに、香川大学医学部附属病院の他科の先生方と協力しながら、膠原病との合併が多い肺高血圧治療や心不全・腎不全患者に対する抗がん剤治療を行い、総合病院としての香川大学医学部附属病院の特色ある医療に貢献してまいります。これらの実践には、讃樹會のみならずとの連携を密接にし、地域連携のさらなる向上に努めることがとても大切であると考えています。

教育：「患者と正面から向き合う血管治療専門医を育成する」

学生や初期研修医には、問診や身体所見を丁寧にとることの大切さを繰り返し伝えていきます。これらの基本となる医療技術の体得に加えて、患者さんと正面から向き合い、寄り添うことの大切さも伝えます。後期研修医には、「できないこと」、「わからないこと」が当たり前と思わないように伝えていきます。そこから生じるクリニカルクエスチョンを解決するためには研究が必要であり、これらに取り組むリサーチマインドを持った「Physician scientist」を育成したいと思っています。さて、アメリカの内科学ウィリアム・オ

スラー博士の有名な言葉に、「人は血管とともに老いる」があります。当教室で取り組んでいる疾患の中には、虚血性心疾患、腎硬化症、脳卒中、末梢動脈病変などのまさしく血管に起因する病気が多くあります。本教室は、冠動脈疾患や末梢動脈疾患に対する血管治療、そして、脳外科の先生と一緒に脳卒中に対する血管治療を「one-stop」で学ぶことができる環境を実現します。この強みを活かして、香川県下のみならず全国から優秀な若手医師を募っていきます。最後に、教室員には、留学を積極的に勧めています。世界を体験し、海外で得られたことと日本での経験をブレンドして自分独自のものを創り上げ、香川大学で力を発揮していただきたいと思っています。

研究：「臨床現場の未解決問題を克服するための研究を行う」

研究は大学病院と他の病院が大きく異なる点の一つです。急性心筋梗塞患者に対してカテーテル治療が成功したにも関わらず、心機能がむしろ障害される虚血再灌流傷害はなぜ生じるのでしょうか？また、心不全の半分以上を占める拡張不全については病態も治療法も分かっていません。腎生検は患者さんのみならず実施する医師にもとてもストレスがかかる検査です。腎生検は画像診断で代用できないのでしょうか？このように臨床現場には様々な未解決な課題が山積しています。これらの課題を解決するためには、心筋虚血再灌流傷害の成立機序や拡張不全の病態を明らかにするための基礎研究が必要です。また、腎生検でしばしば認められる増殖メサンギウム細胞の膜表面に発現している分子を検索する必要もあるでしょう。クリニカルクエスチョンを解決するために積極的に基礎研究や臨床研究を行い、臨床現場に還元していきたいと思えます。また、慢性心不全、慢性腎臓病、心原性脳梗塞に対する地域医療体制の確立を目指します。その中で、日本最大の医療ICTネットワークであるK-MIXを有効に活用したいと考えています。

今後、香川大学学生と教室員を大切に、良医を育て、力を合わせて取り組んで参ります。讃樹會の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴**学歴**

昭和63年3月 大阪大学医学部卒業
平成8年3月 大阪大学大学院医学研究科博士課程(内科系専攻)修了

職歴

昭和63年7月 医員(研修医)(大阪大学医学部附属病院)
平成元年7月 大阪府立病院心臓内科 研修医・レジデント
平成9年4月 日本学術振興会特別研究員
平成10年7月 米国 National Jewish Medical and Research Center・リサーチフェロー(寺田直弘先生教室)
平成11年4月 米国ペイラー医科大学内科学教室
ポストドクフェロー(Michael Schneider 先生教室)
平成14年9月 大阪大学医学部附属病院 医員(循環器内科病棟主任)
平成16年2月 大阪大学大学院循環器内科学 助手
(循環器内科病棟主任～H17.3.31)
平成18年2月 大阪大学医学部附属病院循環器内科 外来医長
平成19年4月 大阪大学医学部講師
平成22年4月 大阪大学医学部附属病院循環器内科 診療局長(～H24.3.31)
平成22年4月 大阪大学大学院循環器内科学 講師
平成25年12月 大阪大学医学部附属病院循環器内科 副科長
平成26年5月 大阪大学大学院循環器内科学 准教授
平成27年4月 大阪大学医学部附属病院 病院教授
平成28年4月 香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科学教授
現在に至る。

第14回讃樹會定期總會開催報告

開催日時：平成28年 5月28日（土） 開催場所：臨床講義棟 1 F
 14：00～14：30 会長選挙・理事選挙公開開票
 14：30～15：00 総会
 15：00～17：00 記念講演会（臨床講義棟 2 F）
 講師：荻田和秀先生
 （7期生・りんくう総合医療センター産婦人科部長）
 演題：「奇跡のすぐそばにということ
 ～周産期医療を喋り倒す～」
 ミニライブ 荻田和秀ピアノトリオ
 18：00～20：00 懇親会（JRホテルクレメント高松）



平成28年5月28日（土）14時半から、第14回讃樹會定期總會が開催されました。前年度同窓会長高橋則尋先生（1期生）によって開会宣言が行われ、会場で承認された平川栄一郎（一期生）議長により議事が進行しました。まず選挙管理委員会内田俊平先生（28期生）から会長選挙及び理事選挙結果が発表され、濱本龍七郎先生（一期生）の会長就任が決定しました。濱本先生は初代の会長であり、この度で2回目の就任となります。理事選挙は、投票者の大多数の信任を受け、各卒年におよそ2名ずつ計58名が今後2年間の理事として決まりました。

高橋則尋先生



新しく就任した濱本会長による所信表明の後、同窓生教授就任の報告が続き、平成26・27年度の事業報告が行われました。次に、平成27年度決算報告・監査報告、平成28年度予算案の審議が続き、定年退官教授の名誉会員への推薦がなされ、会則の条項追加が承認されて全ての議事の審議・承認が無事に終わりました。報告及び議事の内容につきましては、後述の総会議事録を参照下さい。

大森浩二先生



総会后、引き続き記念講演会が開催され、りんくう総合医療センター産婦人科部長荻田和秀先生（7期生）を講師としてお迎えし、「奇跡のすぐそばにということ ～周産期医療を喋り倒す～」の演題でご講演いただきました。荻田先生は、テレビドラマやコミックスで人気のある「コウノドリ」のモデル・監修などでもご活躍され、注目の人として新聞に掲載されるなど、医師業務に加えて取材・ご講演等で大変にお忙しい日程を

中村文洋先生



形見智彦先生



内田俊平先生



平川栄一郎先生

讃樹會総会記念講演のために調整いただき、お迎えすることができました。聴講希望者が300名以上と大変に多く、会場の臨床講義棟2階だけでは申し込み数に対応でき



ず、講義自動収録システムを利用して講義風景を1階にも中継し、そちらは1年生やご父兄を中心に聴講いただきました。

ご講演に先立って、直前の総会で新同窓会長に就任した濱本龍七郎先生の開会挨拶があり、荻田先生と同期の香川大学法医学教授木下博之先生を座長として早速、ご講演が始まりました。まずは大学時代に住んでおられた下宿の懐かしい写真から始まり、産婦人科医師不足による周産期崩壊という流れの中で、産婦人科医として進まれた現在までのプロフィールをお話だけしました。大学在学中は産科の講義で「妊婦を診る時は二人の命を預かっているのだ」と言われたと振り返られました。現在の勤務先であるりんくう総合医療センターは、1次から3次までの産科救急を全て（未受診妊婦や最重症妊婦も含む）引き受けるだけでなく、大阪に限らず、近畿の近隣府県からも受け入れる広域の地域の中核病院であるとのこと（なお婦人科は市立貝塚病院に集約している）。

妊娠や分娩については分かっていない事も多く、かつては分子生物学的な研究にもかなり打ち込み、様々な遺伝子研究（遺伝子発現や遺伝子ゾーニング、オキシトシン研究等）もトライしたものの妊娠の維持原理等は不明であり、いまだ結論は出ていないとのことでした。

世界における日本の周産期死亡率の低さにも触れ（世界でもほぼトップレベルの赤ちゃんが死なない国であり、妊産婦死亡率も低い。日本はかつて多かった自宅分娩から施設分娩に移行する中で周産期死亡が低下した経緯がある）、施設分娩を推奨されました。分娩はどこで産んでも問題が起こりうるため、リスクに対する備えがあるところで産む方が望ましいとのこと（心停止はどの分娩でも起こりうる）

また、りんくう総合医





ご講演中の萩田和秀先生



ミニライブ

療センターで経験された36週1日で院内CPAの心停止妊婦例で、救命救急センターと連携してPCPS（経皮的心肺補助）から死戦期帝王切開術に至り、母子の生命維持に至った事例も提示されました。（死戦期帝王切開は心停止に陥った妊婦に対して、母体蘇生処置の一つとして実施する緊急帝王切開術ですが（3万分娩に1回程度）、たまたまその年は2回も起きました。本来、母体の蘇生措置としての施術のため胎児の生死は問われないが、他の事例報告では母体心停止後の20分以上経ってから娩出した児の生存（インタクト）した報告もある）

更に、話は核心に迫り、日本の周産期医療の現状を欧米と比較し（特に欧米の大学病院に分娩数（1施設あたり年間数千～数万件以上）が相当多いのが特徴で、スタッフもほぼ女性医師が占めている）、日本は小さい施設が少数の分娩を取り扱っているためにお産が分散しており、毎晩全ての施設で当直が必要となり、個々の熱意や体力で医療レベルが規定されている。どこに行ってもある程度のレベルの医療は受けられるのが日本の周産期医療の良い面であるが、このままでは「ガラバゴス化」が進む恐れがあるという現状に触れました。

この日本の周産期医療の状況を改善するためには、集約化するか、あるいはこのままでネットワーク化を整備していくかという分岐点にきており、日本型の安全性の高い周産期医療を目指し、現在、厚生労働省とも協議を重ねているとのことでした。

周産期医療とは何かと考える時、妊娠出産はヒトという種を維持・繁栄させるための生理現象であるが、ほっとおけば3%の新生児と1%の母体が死ぬかもしれないこと、「文化」「伝統」「迷信」が介在し、純粋な科学的アプローチが受け入れられにくいところもあり、「天才的医師」「特効薬」を望む人が多いという現実があること。実際にはカリスマドクターはいないけれど、失ってはいけない命のためにネットワークを維持してできることは沢山あって、現場で踏みとどまっていれば防げる周産期の死亡は沢山あることを話していただきました。

最後に「産科は究極の救急医学であり、医療に限らずいろいろな人たちとのネットワークを繋いで、絶対に失ってはいけないものを留めることがこの仕事の真髄ではないでしょうか。誇り高い仕事であるし、学生の皆さんにはぜひ一度、現場に来てみてください」という言葉でご講演は締められました。

萩田先生は真剣に産科の現状と課題と今後の目指す方向を語りつつ、時にドラマの制作裏話やエピソードなども混ぜ、ご自身が経験された重い症例やテーマも率直かつ誠実な口調で語られ、お話を伺っているだけで、今、赤ちゃんが産まれる現場の緊迫感を体感しているような錯覚に陥るほど熱気を感じられたご講演でした。

質疑応答では「何でも答えます」と宣言されるユーモラスな萩田先生の親しみやす

い呼びかけに応え、次々に質問の手が挙がりました。「医療事故の影響があり産科が減ったケースをどう思われますか」という看護師の方からの質問には、分娩施設が4ヶ所しかないというフィンランドでは施設が遠くても安全であれば通院してくる例を挙げ、利便性と安全性はパラレルではないと思うと意見を述べられました。地域医療に従事する自治医大卒管理職医師から「陣痛が始まってから病院に行くという習慣（文化）がある日本において、陣痛が始まる前からの早めの入院について」の質問には、周産期死亡率の低い北欧は分娩施設数は限られているが、その施設周辺に助産スタッフやクリニック、ホテルが同じぐらい整備されており、今後の日本においても妊娠10か月に入って早めに準備するというように文化を変えていくのは非常にいい対処法だと思うと回答されました。高校2年生の女子から、「テレビを見て、本も読んで大変感銘を受けた。さまざまな苦しい体験をされてきたと思いますが、困難な時に頑張れる言葉を下さい。」との質問には、会場の参加者に思わず微笑みがこぼれました。萩田先生は「僕がその言葉がほしいくらいです（笑）」と受けた後、『まあ、いいか』という言葉が教えてくれました。いい加減にするのではなく、あまり突き詰めないことが大事だと説明を加えられ、『まあ、いいか』という言葉に、座長の木下先生も「いい言葉ですね」と感想を漏らされていました。質疑応答の最後には産婦人科医の先生から、「香川ではなく都会に行きたがる産婦人科志望の学生も多いが、地方と都会の一番の違いは何でしょうか」という質問があり、都会では症例の集積が多い（りんくうが対象としている人口は夜間には80万人口をカバーしている）、多数の症例経験を経た後に地方に戻るといふ双方向の行き来があることで（噴水方式）、これから大きい意味でネットワークの構築ができれば良いという回答をいただきました。

講演の終了後、臨床講義棟の同じ会場で、萩田和秀ピアノトリオによるジャズライブが行われました。会場は講演会場である臨床講義棟2階がそのまま使用され、ここで生演奏が披露されるのは開学以来初の試みであるため、下準備の段階で数週



間前には音響のプロの方により音出しの確認が行われていました。階段教室の構造も幸いして音響効果に問題がないということで、講堂外への音漏れも問題なく、医学科軽音部の全面的な協力により楽器や機材のセッティングされた会場で、荻田和秀先生のジャズピアノ、同期の政田哲也先生のベース、稲生田純一氏（元高校教諭、高松一高軽音部の元顧問にして、香川の音楽好きなみなさんの師匠的存在）のドラムで構成されたピアノトリオによって、「Triste」から始まり、「All The Things You Are」まで4曲が演奏されました。

会場いっぱいの参加者の拍手に包まれ、この日限定のスペシャルなトリオの演奏が終わると、県立保健医療大学保健医療学部看護学科教授の塩田敦子先生の締めのご挨拶をいただき、満員の参加者から本日の講演会及びミニライブへもう一度大きな拍手が寄せられ無事に終了となりました。

懇親会は会場を移し、JRホテルクレメント高松で行われ、荻田先生の同期である7期生を中心に30名近くの参加がありました。

懇親会での和やかな歓談の後、この機会に予定された軽音部OB会目指して、瓦町のSPEAK LOWに集う方も多く、長く心楽しい一日となりました。



懇親会



◆◆第14回定期総会 議事録◆◆

1. 開会宣言

出席者と委任状を合わせて659名の参加となり、正会員(2942名)の10分の1以上を満たし総会が成立した。

2. 議長選出

立候補がなく、満場一致で副会長の平川栄一郎先生(昭和61年卒)が議長に選出された。

3. 選挙開票結果報告

選挙管理委員会内田俊平先生(平成25年卒)から、総会開始直前に実施した公開開票の結果報告があった。

会長選挙は、単独立候補の濱本龍七郎先生への信任投票となり、5月25日までに届いた郵便投票656票のうち、信任640票、不信任4票、白票10票、無効2票という結果により、濱本龍七郎先生の会長就任が決定した。

理事選挙は626票の投票のうち、信任593票、不信任2票、無記名に由る無効31票という結果より、全ての理事候補が信任された。

4. 会長所信表明

信任された濱本龍七郎新会長による所信表明が行われた。濱本先生は初代会長であり、今回二度目の会長就任となる。

5. 教授就任祝賀の報告

前回総会後から平成28年4月までの、新たに判明した卒業生教授就任者について議長から報告された。

6. 平成26・27年度事業報告

事務局長に代わり、中村丈洋広報局長から26・27年度の事業活動が報告された。

【学術局】

・研究助成金事業

平成26年度(第10回)

研究助成金 徳留 健(平成8年卒)

研究奨励金 小川大輔(平成15年卒)

平成27年度(第11回)

研究助成金 小原英幹(平成9年卒)

研究奨励金 濱本有祐(平成12年卒)

・国外留学助成金事業

平成26年度 井上英樹(平成15年卒)

平成27年度 濱本有祐(平成12年卒)

河口浩介(平成18年卒)

豊田康則(平成19年卒)

・講演会事業

平成26年度 第五回市民公開講座(高松市)

平成27年度 第六回市民公開講座(高松市)

・学会助成金事業

平成26年度 第33回日本脳腫瘍病理学会(脳神経外科)

平成27年度 第25回日本意識障害学会(脳神経外科) / 第1回日本下肢救済・足病学会 中国四国地方会(形成外科)

【教育研修支援局】

・研修医支援事業

在学生対象研修プログラム説明会・診療科合同説明

会・指導医養成講習会・5年SG別説明会・修学生対象研修説明会・個別説明会・病院見学者支援等、香川大学医学部附属病院研修医獲得への協力費用の支援。

研修オリエンテーション・コーヒーメーカーやウォーターサーバー設置・モーニングセミナー等、本院研修医への支援。

・学生援助

① 学生の国際交流助成；

大学間国際交流協定締結校への学生の短期留学へH26年度20名、H27年度16名 計36名に助成。

② ACLS勉強会に助成；講習会開催における諸費用の一部援助。

・国際交流協力事業

① 河北医科大学、ブルネイ・ダルサラーム大学、チェンマイ大学の学生の短期来学時に本学学生との交流会支援。

【広報局】

・会報発行；2年間で計4号(48～51号)を発刊

【事業局】

・医師賠償責任保険取扱い事業；10年目の加入者数670名で、保険料は団体割引最高割引率の20%適用。

・後援協賛事業；新入生歓迎行事、医学部祭、謝恩会へ寄附。卒業生に記念品(ネームペン)贈呈。謝恩会イベント「Outstanding Teacher of the Year」への協賛。

・支部・同期会懇親会費用助成；

「関東支部会」「三木先生・日下先生教授就任祝賀会」「舩形先生教授就任祝賀会」「平成2年5期生教授就任祝賀会」「ヨット部OB会(日下先生教授就任祝賀会)」「昭和62年卒同期会」「平成16年卒同期会」「平成6年卒同期会」「平成7年卒同期会」「沖縄支部会」

【木蓮会支援事業】

事務補助委託契約を毎年更新。

【その他】

① 連合会

香川大学同窓会連合会の会員として、他学部同窓会との連携を深めている。

② 理事会開催

平成26年度 8/5、11/10

平成27年度 8/3、12/8 計4回

③ HPの更新、FB開設

7. 平成27年度決算報告および監査報告

・27年度単年度決算につき大森浩二事業局長から報告が行われ、監査委員長の形見智彦理事から監査報告が行われた。

8. 28年度予算案承認の件

大森浩二事業局長より予算案の説明があり、承認を得た。

9. 名誉会員推薦の承認の件

退官を機に名誉会員就任が推薦され、承認された。
 森 望先生（香川大学元医学部長、耳鼻咽喉科学元教授）
 河野雅和先生（循環器・腎臓・脳卒中内科学元教授）

10. その他

理事会から審議要請があり、会則に条項追加が提案され承認された。

第8章 会則の改正

第47条 会則の改正は、総会の議決による。総会が開催不可能な場合や緊急時には、理事会がこれを代行できる。

11. 閉会宣言



平成28・29年度理事一覧

	卒年	理事		卒年	理事		卒年	理事
1	S61年	大西 宏明	21	H9年	上田 修史	41	H19年	石川 一朗
2	S62年	形見 智彦	22		村上 和司	42		小林 守
3		河井 信行	23	H10年	金地 伸拓	43	H20年	石川 昇平
4	S63年	西田 智子	24		古泉 真理	44		則兼 敬志
5		横井 徹	25	H11年	安藤 延男	45	H21年	加藤 歩
6	H元年	上枝 宏和	26		三谷 知生	46		木戸 瑞江
7		北条 聡子	27	H12年	印藤加奈子	47	H22年	小林 伸也
8	H2年	羽場 礼次	28		亀田 智広	48		千代 大翔
9		吉田 智子	29	H13年	泉川 美晴	49	H23年	高田 忠幸
10	H3年	出石 邦彦	30		西庄 佐恵	50		納田早規子
11		中條 浩介	31	H14年	垂水晋太郎	51	H24年	大西 啓右
12	H4年	田井 祐爾	32		谷 丈二	52		小林 俊博
13		政田 哲也	33	H15年	門田 球一	53	H25年	内田 俊平
14	H5年	金西 賢治	34		吉本 卓生	54		西岡 里香
15		川西 正彦	35	H16年	奥田 花江	55	H26年	近藤 惇
16	H6年	浅賀 健彦	36		祖父江 理	56		多田 尚矢
17		串田 吉生	37	H17年	今井 秀記	57	H27年	下野 愛子
18	H7年	井町 仁美	38		坂本 鉄平	58		白石 練
19	H8年	野間 貴久	39	H18年	小野 葵			
20		村田 晶子	40		篠原奈都代			

平成27年度会計報告

平成27年度収支計算報告書

平成27年4月1日から平成28年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,000,000	9,075,000	1,075,000
②寄付金・広告収入	1,200,000	1,029,784	-170,216
③委託手数料収入	1,700,000	1,584,659	-115,341
④雑収入		3,692	3,692
事業活動収入計	10,900,000	11,693,135	793,135
2. 事業活動支出			A) - B)
① 事業費支出			
会報制作費	800,000	817,128	-17,128
後援協賛事業費	500,000	516,555	-16,555
支部・同期会費	500,000	780,820	-280,820
学術助成金事業費	1,800,000	1,613,496	186,504
国外留学助成金事業費	500,000	501,000	-1,000
学生援助費	650,000	528,498	121,502
国際交流協力費	500,000	320,000	180,000
研修医協力費	1,000,000	1,001,367	-1,367
講演会費	500,000	414,872	85,128
学会助成金事業費	100,000	140,000	-40,000
事業費支出小計	6,850,000	6,633,736	216,264
②管理費支出			
事務人件費	2,000,000	2,096,500	-96,500
事務局・各委員会運営費	1,000,000	1,191,471	-191,471
事務局設備投資費	200,000	102,600	97,400
通信費	600,000	769,834	-169,834
慶弔費	200,000	158,700	41,300
雑費	150,000	82,668	67,332
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	0
管理費支出小計	4,250,000	4,501,773	-251,773
事業活動支出計	11,100,000	11,135,509	-35,509
当期事業活動収支差額	-200,000	557,626	
前期繰越収支差額	34,090,823	34,090,823	
次期繰越収支差額	33,890,823	34,648,449	

貸借対照表

平成28年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(34,648,449)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	34,648,449	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,068,434)		
一括償却資産	68,434		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	34,716,883
合計	50,716,883	合計	50,716,883

財産目録

平成28年3月31日

単位：円

資産の部	
1. 流動資産	
(1) 現金・預金	
イ) 手許現金	55,080
ロ) 普通預金 百十四銀行三木支店	1,908,439
ハ) 郵便貯金 郵便振替貯金事務センター	21,416,465
ニ) 定期預金 香川銀行本店営業部	10,190,498
百十四銀行医大前出張所	1,077,967
流動資産合計	34,648,449
2. 固定資産	
(1) 有形固定資産 一括償却資産	68,434
(2) 特定目的資産 同窓会館建設引当預金	16,000,000
固定資産合計	16,068,434
資産合計	50,716,883

固定資産の内訳 (平成28年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得 年月	取得 価額	償却方法	耐用 年数	償却率	当期 償却額	未償却 残高
沖データプリンター	1	27.12	102,600	一括償却	3	0.333	34,166	68,434
			102,600				34,166	68,434

監査報告書	
平成28年5月9日	
香川大学医学部医学科同窓会 讚謝會 会長 高橋 剛 殿	
公認会計士 岩村 浩二	
私は、香川大学医学部医学科同窓会讚謝會の平成27年4月1日から平成28年3月31日に至る平成27年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。	
以上	

監査報告書	
平成28年5月20日	
香川大学医学部医学科同窓会 讚謝會 会長 高橋 剛 殿	
監査委員長 形見 智志	
讚謝會監査委員会は、平成27年4月1日から平成28年3月31日に至る平成27年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。	
以上	

平成28年度予算及び組織図

平成28年度予算

平成28年4月1日から平成29年3月31日まで

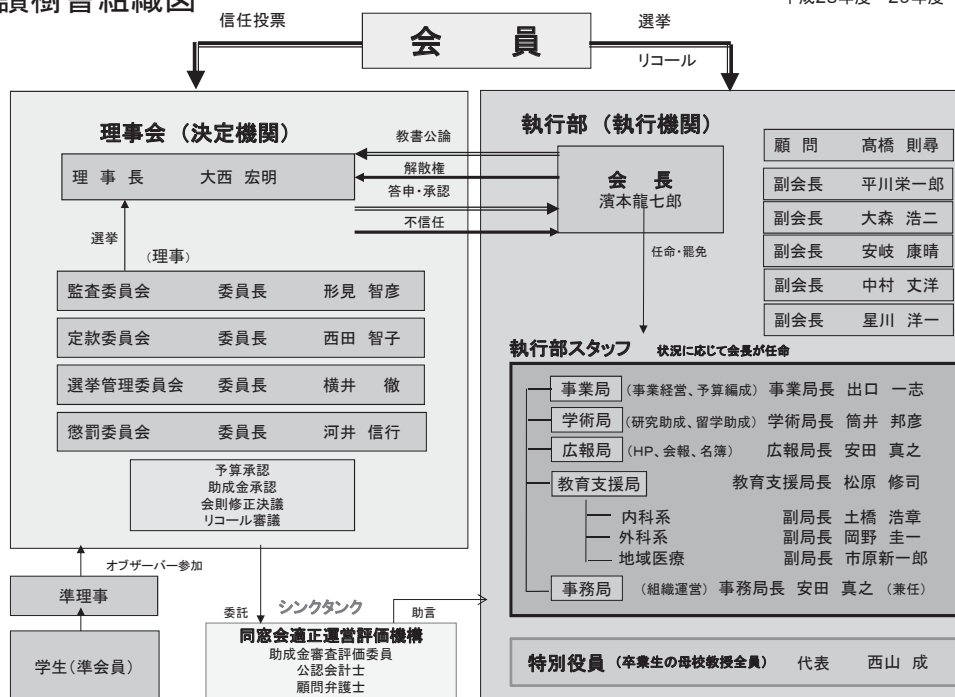
事業活動収支の部

単位：円

科 目	28年度予算	27年度予算	27年度決算
1.事業活動収入			
①会費・入会金収入	9,000,000	8,000,000	9,075,000
②寄付金・広告収入	1,200,000	1,200,000	1,029,784
③委託手数料収入	1,600,000	1,700,000	1,584,659
④雑収入			3,692
事業活動収入計	11,800,000	10,900,000	11,693,135
2.事業活動支出			
①事業費支出			
会報制作費	830,000	800,000	817,128
後援協賛事業費	540,735	500,000	516,555
支部・同期会費	500,000	500,000	780,820
学術助成金事業費	1,615,000	1,800,000	1,613,496
国外留学助成金事業費	500,000	500,000	501,000
学生援助費	528,000	650,000	528,498
国際交流協力費	200,000	500,000	320,000
研修医協力費	1,000,000	1,000,000	1,001,367
講演会費	330,510	500,000	414,872
総会費	350,000		
学会助成金事業費	100,000	100,000	140,000
香川県医学会助成費	500,000		
事業費支出小計	6,994,245	6,850,000	6,633,736
②管理費支出			
事務人件費	2,170,000	2,000,000	2,096,500
事務局・各委員会運営費	1,304,012	1,000,000	1,191,471
事務局設備投資費	150,000	200,000	102,600
通信費	610,000	600,000	769,834
慶弔費	140,000	200,000	158,700
雑費	82,910	150,000	82,668
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	100,000
管理費支出小計	4,556,922	4,250,000	4,501,773
事業活動支出計	11,551,167	11,100,000	11,135,509
当期事業活動収支差額	248,833	-200,000	557,626
前期繰越収支差額	34,648,449	34,090,823	34,090,823
次期繰越収支差額	34,897,282	33,890,823	34,648,449

讃樹會組織図

平成28年度～29年度



理事会議事録

平成28年度第1回理事会 平成28年8月2日(火) 20:00~20:40

1) 会長所信表明及び新執行部人事の発表

5/28の讃樹會定期総会で第三代会長に就任した濱本龍七郎会長から就任挨拶があった。「設立から30年を経て、新しい展開を実現する時期に入ったと感じており、今回、短期間であるが引き受けた。執行部の構成は、前会長の高橋先生には顧問になっていただき、副会長を今までの3名から5名に増やし充実させた。副会長には、平川栄一郎先生、大森浩二先生、安岐康晴先生、中村文洋先生、星川洋一先生に就任いただいた。事業局長出口一志先生、学術局長筒井邦彦先生、広報局長兼事務局長安田真之先生、教育研修支援局長松原修司先生、同副局長は前年度通り土橋浩章先生、岡野圭一先生と、徳島県立中央病院の市原新太郎先生に新しくお願いして3名となった。執行部の数をかなり増やし、これから2年間、今までにない充実した同窓会をもう一度やり直したいと思っている。」とし、理事の協力を仰いだ。

2) 理事長選出

副会長の平川栄一郎先生が代理議長となり、理事長選出の議事が進行した。事前に行った理事からの推薦が、現理事長の大西宏明先生が34票を獲得していて大多数であることに基づき、大西先生に引き続き理事長に就任いただくことが拍手で承認された。

大西先生から「香川大学医学部同窓会も30年経ち、本当に大きくなってきていると思う。執行部も刷新し、副会長が増えられて、いろいろな方面で更に発展していくことが期待される。理事も年々人数が増えてきており、各学年の意見を吸い上げて、いろいろなことを執行部にお願いしたり決めていくことのできる理事会にしたい。」との挨拶があった。

3) 常任委員会委員長選出

監査委員会、選挙管理委員会、懲罰委員会、定款委員会の4つの委員会について、事前の希望アンケートに基づき事務局の方で行った配置案が拍手で承認された。各委員長の選出方法として、学年の上の先生に就任いただくのが最も議事を進めやすいと考えられるとの提案があり、拍手で承認された。その結果、監査委員長は形見智彦先生、懲罰委員長は河井信行先生が該当し理事会に参加されているのでその場で承諾いただき、理事会欠席の選挙管理委員長候補の横井徹先生と定款委員長候補の西田智子先生には後日事務局から連絡し承諾いただくこととなった。

4) 研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

筒井学術局長から応募状況及び選考経緯の説明があり、今回14名の学外評価委員の先生により評価をいただき、執行部では、各部門で評価アベレージの第一位を選考の対象としたいとの提案があり、評価一覧が資料として配布された。議長が理事に質問、意見を求め、理事から選考対象者の同窓会費の納入状況について質

問があり、筒井学術局長から両名とも条件を満たしていると返答があった。評価一覧については、理事会終了後、回収されるため、本理事会においてしっかりと目を通すよう議長から促された。以上を経て、研究助成金は森下朝洋先生、研究奨励金は藤原新太郎先生の受賞が拍手で承認された。

5) 研究助成金及び研究奨励金外部評価委員推薦のお願い

筒井学術局長から、現在、臨床系6名、基礎系8名で計14名の外部評価委員がおられ、この中で基礎系で長年評価委員を務めていただいた先生が1人、今回、辞退の希望があることが報告された。執行部から臨床系と基礎系をそれぞれ8名ずつお願いするか、基礎・臨床を問わずに16名にお願いするかを理事会で決めてほしいという要望が出され、8名ずつの同数でお願いすることに決まった。

引き続き、新しい評価委員を理事及び執行部からの推薦で募るため、医学部退官教授の名誉会員の先生方の一覧表が資料として提示され、名誉会員の先生方も含め、外部評価委員を推薦用紙で9月30日までに返信いただくよう筒井学術局長からお願いがあった。流れとしては、推薦された先生へ同窓会としてお願いしていくこととなる。

大西議長から、各学年に声をかけてできるだけ多くの方の意見をいただきたいことと、以前に評価委員を断られたことがある先生でも、再度依頼させていただくことも可能であること、後日、事務局から推薦用紙フォームが配布されるので推薦いただくよう重ねてお願いがあった。

6) 学会助成金の審査・決定

筒井学術局長から、学会助成金制度要項の説明後、今回、一件の申請があったことが報告された。理事から、申請時の参加予定人数と、実際の参加人数についての照合をしようかという質問が上がった。要項の助成条件7-2「終了後6か月以内に収支決算書等、会の開催を証明するものを提出する」に基づき、実際の参加人数が申請時と合致しているかどうか確認することとなった。

学会開催が増えているが運営もむづかしい面があるので、学会助成制度があることを会員や教室に広くアナウンスして少しでも利用してほしいと大西議長及び筒井学術局長から話があった。ただ、金額が小規模であるので執行部として予算枠の中で何らかの検討をしてほしいということも付け加えられた。

速報

平成28年度 讚樹會研究助成金/研究奨励金 選考結果

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	森下朝洋 (平成9年卒) 香川大学医学部 消化器・神経内科	非アルコール性脂肪性肝炎の進展及び発癌を抑制するGalectin-9の作用機序に関するターゲットマイクロRNAの同定。
研究奨励金	藤原新太郎 (平成19年卒) 香川大学医学部 消化器・神経内科	バレット食道腺癌におけるアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬テルミサルタンの抗腫瘍効果のメカニズムと関連するマイクロRNAについての研究

◆選考過程のご報告◆

第12回(平成28年度)讚樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は3件、研究奨励金部門2件の全5件の申請がありました。

これに対しまして、下記学外評価委員14名によって評価を受けました。

具体的には外部評価委員一人ひとりに、5件の申請全ての採点をお願いしました。ただし、外部評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしました。その結果、各申請者に対して12~14名の外部評価委員から評価を得ることができました。

採点は6つの項目(1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度)に対して、それぞれ5段階評価(5点:極めて高い、4点:高い、3点:やや高い、2点:やや低い、1点:低い)を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成

金部門では森下朝洋先生の「非アルコール性脂肪性肝炎の進展及び発癌を抑制するGalectin-9の作用機序に関するターゲットマイクロRNAの同定。」(3.96点/5点満点)が第一位となりました。研究奨励金部門では藤原新太郎先生の「バレット食道腺癌におけるアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬テルミサルタンの抗腫瘍効果のメカニズムと関連するマイクロRNAについての研究」(3.58点/5点満点)が第一位となりました。また、今年度の全体の平均点は3.57点/5点満点でした。

外部評価を基に8月2日開催の平成28年度第1回理事会において、森下朝洋先生に金壱百万円、藤原新太郎先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

外部評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讚樹會研究助成 学外評価委員

臨床科

(敬称略)

	氏名	役職	勤務先	所属
1	香美 祥二	教授	徳島大学医学部医学科	発生発達医学講座 小児医学
2	成瀬 光栄	内分泌研究部長	国立病院機構京都医療センター 内分泌代謝研究センター	内分泌代謝高血圧研究部
3	吉栖 正生	教授	広島大学大学院医歯薬学総合研究科	創生医科専攻 探索医科学講座 心臓血管生理医学
4	今井 裕一	教授	愛知医科大学	腎臓・リウマチ膠原病内科
5	伊藤 進	名誉教授	香川大学	(小児科)
6	水野 博司	教授	順天堂大学医学部	形成外科学講座

基礎科

1	梶谷 文彦	名誉教授	川崎医療福祉大学客員教授/岡山大学特命教授/AMED医療機器開発推進研究事業プログラムスーパーバイザー	
2	西堀 正洋	教授	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科	薬理学
3	藤田 守	客員教授	久留米大学医学部客員教授/長崎大学医学部非常勤講師/産業医科大学医学部非常勤講師	
4	三浦 克之	教授	大阪市立大学大学院医学研究科	薬効安全性学
5	森田 啓之	教授	岐阜大学大学院医学系研究科 神経統御学講座	生理学分野
6	田畑 泰彦	教授	京都大学再生医科学研究所	生体組織工学研究部門生体材料学分野
7	徳光 浩	教授	岡山大学大学院自然科学研究科	生命医用工学専攻 細胞機能設計学
8	小林 良二	名誉教授	香川大学	(生化学)

熊本地震災害ボランティア体験記

～熊本に笑顔届けたい～

香川大学医学部医学科4年 岡田 悠輝

この度、香川大学の防災チームの一員として、地震のあった熊本でボランティア活動をさせていただいた。経済学部の友達が益城町に住んでいることもあり、すでに夏休み中に熊本へ行こうと予定していたが、大学で防災チームとして参加した方が、より貢献できるのではないかと考え参加を申し込んだ。

私が熊本へ足を運んだのには大きく2つの理由がある。

まず何よりも、益城町で頑張っている友達を元気にしたかったからである。幾度もの地震、避難所での生活、大雨による被害、そして地元での就活も重なり大変つらい思いをしていると聞いていた。だからこそ、自分が行って元気にしてあげたい、少しでも笑顔届けたいと強く考えた。

もうひとつは、自分がされて嬉しかったことを恩返ししたかったからである。2年前の広島土砂災害で、私の家のある緑井地区も大きな被害を受け、多くの家が崩れ、14名の方の貴い命も奪われてしまった。私の家は、崩れた箇所、土砂の流れる方向、また道路から少し高くなっているため、土砂を被ることもなく、浸水も奇跡的に避けることができたのだが、自転車で2-3分走れば、そこは土砂が腰上までできていた。毎日、近隣の方々の家、道路の泥をかき出す中で疲労もたまってきたが、ニュースを見て県外からも多くの方が駆けつけてくれた。私は、たくさんの方が自分に何かできることはないかと考えて、自ら足を広島へ運んでくださっていることにとても感激した。だから、私は、熊本で地震が起こった時、広島に沢山の人が来てくださった恩返しとして、何か自分にできることはないだろうか考えた。



上：広島に来てくださったボランティアのみなさんと
下：広島土砂災害直後の写真



写真：炊き出し&カフェのテント

この度のボランティア活動ではメインとして益城町の広安西小学校で炊き出しを行った。にゅうめんの炊き出し、カフェの併設、子どもたちと遊ぶグループのテントに分かれて行った。炊き出しは食事を提供するという意味だけではなく、被災されている方に元気を届けるという意味の方が強いと感じた。というのも、避難所での食事は、朝昼夜と支給されるコンビニのパン・おにぎり・冷めたお弁当の毎日、カロリー重視のそっけないものだからである。ほとんどの人が栄養バランスの偏りから口内炎ができるそうだ。

炊き出しを行う中で、被災されている方々とお話することができた。まず、3人の子供を持つ父親からは、「防災など興味がなかったが、実際に自分が災害にあって初めて重要性を感じた」と伺った。また、地震の後の苦勞として、一番下の子どもが0歳なので、おむつが不足したり、泣いてしまったり大変だったと話してくださった。そして災害後の時期によって、必要とされることが変わってくることを教えてください

た。現在は、物資がある程度足りてきているので、被災されている側としては『楽しみ』がほしいそうである。今日の炊き出しにも半壊したお家から家族ずれで来てくださったという。今回だけではなく、大学生の元気を分けてあげられるようなイベントができればいいなと思った。

併設したカフェでは、ゆっくりと避難所で生活されるお年寄りの方とも話すことができた。健康が気になりだと話してくださった。配給されるものは野菜が少なく、毎日かかさず野菜スープを作って飲んでいるそうである。他にも、エコノミークラス症候群が心配だとか医学生として色々と聞かれた。今回の香川大学の防災チームのバックに株式会社レアスウィートさんがついてくださっていたこともあり、希少糖シロップの配布も行った。香川大学医学部の学生として、希少糖の何が良いのか医学的にみなさんへ説明させていただいた。体脂肪・肥満や動脈硬化といった生活習慣病が気になる方が非常に多く、画期的な製品だと喜んでくださっていた。「抗がん作用やアンチエイジング効果もあるのではないかとされており、今研究中なんですよ！」と説明すると、もし本当



写真：炊き出しのデモンストレーション。
※被災されている方への配慮から、撮影禁止のため、実際の炊き出しの写真はありません。



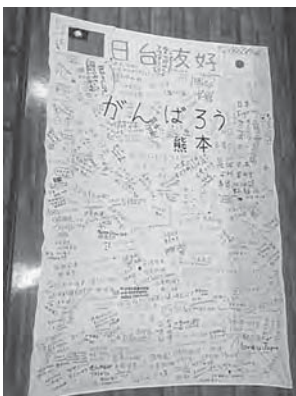
写真：香川大学防災サポートチーム

にあるなら、毎日かかさず使いたいと意気込んでいらっしやう。

今回熊本に行ったことで、決して大きなことができたわけではないが、何人かの方に笑顔が届けることができた。また、益城町に住む経済学部友達もボランティアに参加して一緒に活動することができた。気分が暗くなっていると聞いていたのだが、終始笑顔で、何よりも良かったと思う。そして、一番学んだ事は、被災地の方がどんな困難も乗り越えて、力強く生きているということだった。しかし、それは周りのサポートがあつてのことなんだと友達は教えてくれた。私は、その言葉に、助け合って生きることの意義を強く感じた。助け合うことがこれほどまでに大切なんだと改めて感じたのであった。

～お願い～

先日、台北や台中を初め、様々な場所で街頭に立ち、いつも困った時に助けてくださる台湾のみなさんへ感謝の意を伝えました。また、同時に台湾の方々から熊本へ向けて応援メッセージをいただき、応援旗と応援ビデオとしてまとめました。応援旗は友達がいた広安小学校へ届け、応援ビデオはFacebookを中心に熊本の方々へ送りました。YouTubeにもアップしましたので、お知り合いに熊本の方がいましたら届けていただけますと幸いです。ひとりでも多くの熊本の方へ届けたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



URL:<https://youtu.be/depXTDAmYYE>
もしくは「台湾から熊本へ応援メッセージ」で検索！

左：応援メッセージ旗（香大病院の不要なシートをいただきました）
右：台北の中山駅前にて

特集 開業医だより

卒後30年目の研修医

医療法人財団喜望会谷向病院 谷向茂厚（昭和62年卒）／兵庫

卒業後を振り返って

田中レディースクリニック 田中恭子（昭和62年卒）／福岡

～正しい選択とは？～

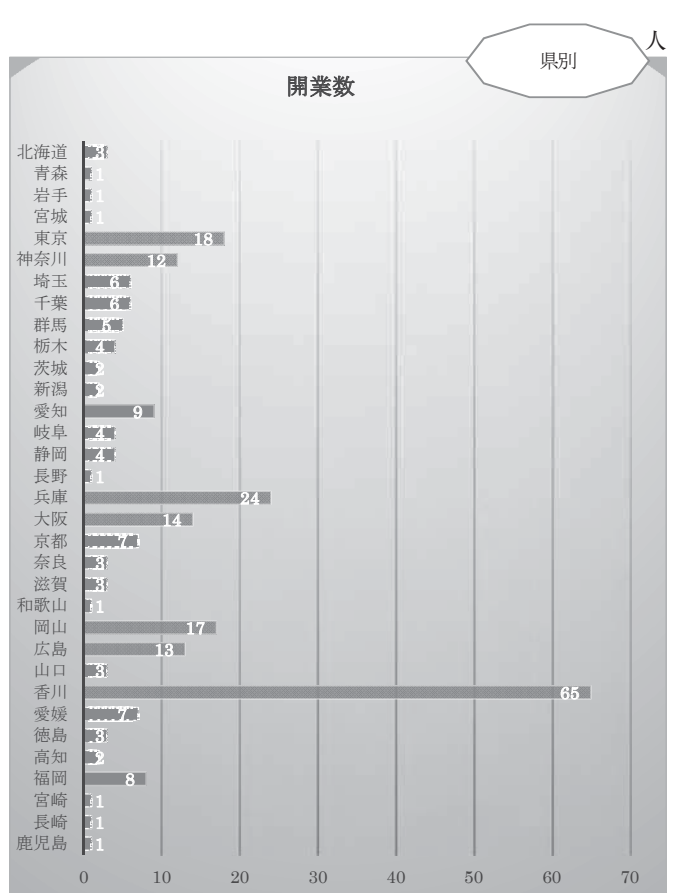
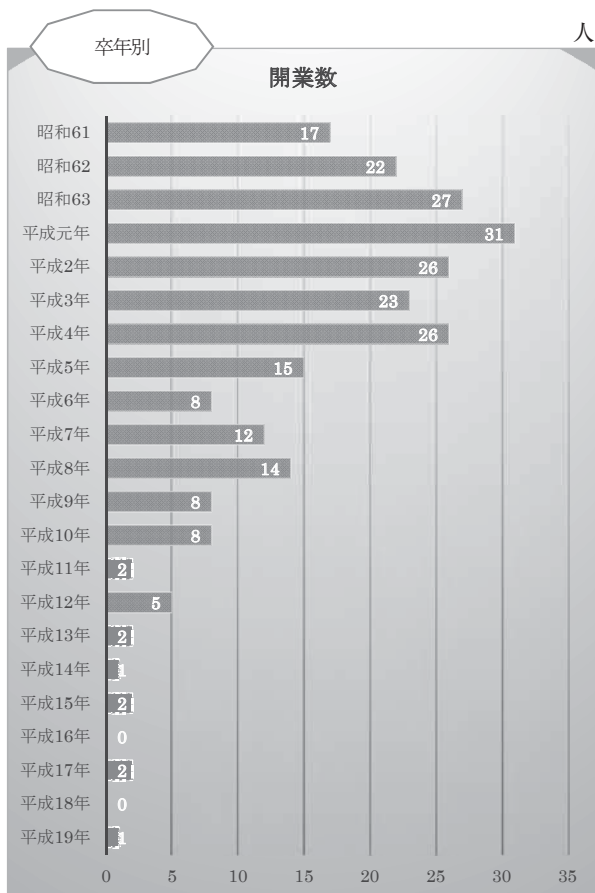
はとりこどもクリニック 水野恵介（平成8年卒）／静岡

あっという間の24年間

医療法人一進会河合外科・内科 河合友子（平成4年卒）／岡山

更なる野望のために

小林耳鼻科醫院 小林英治（平成9年卒）／香川



卒後30年目の研修医

医療法人財団喜望会谷向病院
谷向 茂厚（昭和62年卒・第2期生）

香川医科大学2期生（昭和62年卒業）の谷向茂厚です。

現在、兵庫県西宮市で医療法人財団喜望会谷向病院の理事長をしています。

香川医科大学を卒業後、京都第一赤十字病院に研修医として入社すると同時に当時の京都府立医科大学第二外科に入局しました。

京都第一赤十字病院で、一般外科、心臓血管外科、麻酔科などを中心に研修医、レジデントとして4年間を過ごしたのち京都府立医科大学で3年間、消化器外科、心臓血管外科、移植外科の修練医として勤務しました。

その後、2年間の研究生生活を経て、公立南丹病院に勤務したのち実家である現在の谷向病院に副院長で勤務することになりました。

当時の谷向病院は59床の結核病棟を有する築30年越えの老朽化した150床の病院で、院長であった父が病院の内部にあった看護婦寮を制度が始まったばかりの介護療養病棟に転用することでなんとか経営が成り立っていた状態でした。

その後父が他界した為、経営を引き継がざるを得なくなりました。

建物の老朽化、隔離入院日数の短縮に伴う結核病棟の稼働率の低下など、問題は山積みでしたが、なんとか建物の全面建て替えと30床の増床をすることができ、新病棟完成後数年して、結核病棟を障害者病棟とのユニット化とすることで結核病棟の稼働率の低下の問題も解決できました。

現在一般病棟60床、医療療養病棟60床、障害者病棟32床、結核病棟28床、の計180床で診療を行っています。

近年結核病床の閉鎖が相次ぎ、当院の結核病棟には県内だけでなく、県外からの入院も増えてきています。

しかし、結核患者の減少とともに結核診療に関わる専門医も少なくなり、数年前からは消化器外科医のかたわら、内科の先生方とともに結核診療にも従事せざるを得なくなりました。

このため、清瀬の結核予防会で研修を受け、卒後30



年目にして結核医療の研修中です。

当院は名神高速道路の西宮インターチェンジの北側に面しており、阪急電車、阪神電車とも今津駅から徒歩3分とアクセスの面では恵まれた環境にあります。

排菌陽性の結核患者様の受け入れは積極的に行っておりますのでご紹介いただければ幸いです。

卒業後すぐに香川県を離れましたが、香川医科大学の同窓生の皆様には現在まで色々と助けていただきました。

同学年の中村健司君、坪田典之君には一時期、常勤医として助けていただき、坪田君には現在でも月に一度、結核治療の指導に岡山から来ていただいています。

また、当院近隣の医療機関（兵庫医科大学、明和病院）にも卒業生が多くおられ、また数年前には姫路で病院を経営している（神戸北野で結婚式場も経営されていますが）同学年の磯篤典君が二つ目の病院として宝塚にも新病院を建てられました。

いつもお世話になっている同窓生の方々に紙面をお借りして御礼いたします。

これからもよろしく御願ひ致します。

卒業後を振り返って

田中レディースクリニック

田中 恭子 (昭和62年卒・第2期生)

大学を卒業してはや二十九年、二期生の田中（旧姓馬渡）恭子です。この度は同窓会誌への原稿の御依頼を頂き、細々と外来診療を午前中のみ行なっている身ですが近況をご報告させていただきます。

大学を卒業後、実家が産婦人科であったご縁で九州大学医学部産婦人科学教室に入局させて頂きました。

父も祖父も同じ医局の出身で産婦人科は私自身にとって、深くなじみある科でもありました。研修四年目に同じ医局の先輩であった主人と結婚し次の年に娘を授かり出産しました。産婦人科医として出産は貴重な経験でありましたが、やはり子育てしながらの勤務は大変で家族の支えなくしてはできなかつたと思います。義理の母、姉に助けられてなんとか仕事を続けてこられました。何事も周囲の理解と協力が必要で、私は恵まれていたと感謝しています。

主人の父も産婦人科を開業していましたが病で倒れ病院を一時閉院していました。クリニックに改装しての再開に伴い私も開業を手伝う事となりました。新しいクリニックは分娩を取り扱わず、外来のみで行う事としました。

私たちのクリニックは福岡市南区大橋にあります。福岡の繁華街である天神から急行電車で二駅、博多駅、福岡空港へのアクセスも良く大変便利な場所です。周りは九州大学大橋キャンパス、第一薬科大、その他にも短期大学が点在し学生の多い街でもあります。

開業当初はお産を扱わない婦人科クリニックはあまり多くはなく、それでやっていけるのか周りは心配もしていたようです。幸い立地にも恵まれ、本当に細々とですがなんとか今までやってこられました。

取扱う疾患は主に子宮筋腫や子宮内膜症等の良性疾患の診断とフォロー、若い方の月経困難症の内服治療、月経周期異常の治療等です。近くに福岡赤十字病院、九州がんセンター等があり、手術が必要となられたらご紹介させて頂くという橋渡しをするような役目です。開業して二十年以上たちますのでなじみの患者さんも多く、開業当初に不妊治療で生まれたお子さんが中学生、高校生となり生理不順や月経困難のため来院されたり、家族ぐるみのお付き合いも増えました。特別な技術はありませんがなんでも相談しやすい事くらいが良いところかもしれません。

娘も今年、医科大の五年生になり子育ても終盤に入りました。五十を過ぎてからは体力の低下を身にしみ感じ、これからは自身の健康管理が最も重要だと感じています。

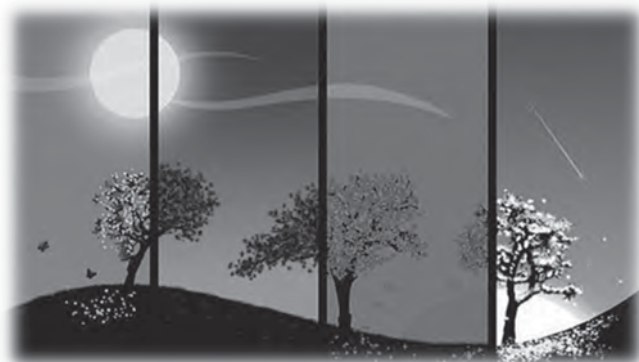
近況としましては週二回のジム通い、ボケ防止に隔週パソコン教室、癒しの大好きな宝塚、二期生の同窓会で繋がったLINEゲームの輪。ツムツムでハートを送りあって東京、大阪、香川の同級生と安否確認の毎

日です。

時間の流れと共に、自分も年をとり、職員も若い看護師から、おばちゃんになり、患者層もご高齢の方が増えました。開業当初、近くにいらっしゃった婦人科開業医の先生も引退されたり、ご高齢で亡くなられたりしました。私たちがその先生方が診ておられた方たちを診ていく役目となってきたのかもしれない。

診療にあたっては、いつも自分では誠心誠意、精一杯やってきたつもりです。けれども所詮、不器用で能力にも限りがあり、振り返れば家族、スタッフに助けられながら、また患者さんとの診療の中で少しずつ成長しながらようやくやってこられたのだと感じております。ご参考になる事は何ひとつ書けていないので申し訳ありません。

月日は飛ぶように過ぎ去り、季節は移ろい続けて行きます。喜びの日も悲しみの日もこれからも続いて行くのでしょうか。残りの人生を心穏やかに過ごして行ければ、と感じております。



～ 正しい選択とは？ ～

はとりこどもクリニック（小児科診療所：静岡市葵区）

水野 恵介（平成8年卒・第11期生）

このたび、執筆依頼をお受けしましたが、「開業してやっと3年になろうかという自分でいいのか？」という疑問もありました。得てして開業医だよりの内容は「地域の役に立つのが夢だった」「郷里に貢献できて幸せ」的な内容になりがちですが、今回はややリアルな感じで、皆様の参考になればと思い執筆させていただきました。

私は平成2年に当時の香川医科大学に入学いたしました。コトデン高田駅の近くのアパートに入居しましたが、6人の同級生が一緒でした。入学式数日後に夜に私の部屋で6人が大騒ぎしていると、隣の部屋から「今日だけは、勘弁してくれないだろうか」と言われてしまいました。今では考えられませんが、当時の国家試験は卒業後の4月にあり、隣の部屋の方は自分たちの6年先輩でした。現在の放射線医学教室の西山佳宏教授です。あの時はすいませんでした。

さて、そんな私も仲間に恵まれ、何度かの留年の危機を辛くも免れまして、平成8年に卒業し、当時は整形外科を考えておりましたため、名古屋大学医学部附属病院のスーパーローテート研修を開始しました。ところが、名大病院はまだ研修医受け入れ数年目といった実績しかなく、救急外来もなく、研修医は放置されている状態が多かったため、1年で出身地である静岡市の静岡済生会総合病院に1年目研修医として再スタートを切りました。ここでは救急の初療から重症患者など多く経験させていただきました。専門に関して



は当時自分の考えていた、整形外科と一般病院のそれが大きく離れていたため、迷っていましたが、以前から興味があった小児科になることにしました。その後は、名古屋市立大学小児科に入局し、関連病院、大学病院に勤務し、主にNICUでの仕事に携わるようになりました。大学院生と助教の時には「新生児における低酸素虚血性脳症に対するEPOの効果」を研究してきました。しかしながら、研究の世界は厳しく、限界を感じたため古巣の静岡済生会総合病院小児科に再度赴任しました。当時はここに骨を埋めるつもりで、しばらくは順調な日々が続きましたが、科長の立場だと診療科収入などの問題で経営側と意思疎通が良くないことも多く、さらに今後自分がNICUでの診療を続けていける自信が持て



外観

なかつたために開業を決意しました。まずは薬品の卸会社にコンサルトをお願いし、物件の有無、賃貸価格、妥当な患者数があるかといった診療圏調査を依頼しました。最初の物件は有床診療所が隣地に拡大移転するため、跡地を賃貸という形でした。しかしながら駐車場と賃貸費用で折り合わず、断念しました。次の物件はやや人口の少ない地ですが、半径2km圏内に小児科がない、医療パーク（内科、整形外科、

調剤薬局)内でした。こちらは賃料、予想集患数ともに妥当性のあるものでしたので、こちらに決めました。現在の診療所です。それからはハウスメーカー、医療機器メーカー、広告会社などと連絡の毎日が続きましたが、2013年9月9日、開業意思決定から1年半と比較的早期に静岡市葵区山崎に“はとりこどもクリニック”を開業しました。“はとり”は山崎の隣のメジャーな町名である羽鳥からいただきました。

理解していたつもりですが、それまでの勤務医、特にNICUをやっていた者からすると、毎日、午前と午後の外来はメリハリが薄く、「本当に開業医になってよかったのか？」と思います。病棟でゆっくりお話をしたり、処置をしたりすることはまずありません。多くの患者さんに来院してもらうのはうれしいのですが、流れ作業的になってしまう自分に気が付くと気持ちが沈む事もあります。患者さんには傾向があり、頻繁に来る方、小児科には多いのですが、季節の変わり目に来る方、きちんと定期的に来る方、慢性疾患で管理しているのに突然来なくなり、悪くなって来る方、診療終了時間ギリギリに来る方など、生活背景をかかえるといろいろな方がいると思うのが実感です。小児科診療所はほとんどが軽症例の急性疾患が多いのでコミュニケーションは軽くなりがちで、母親との会話が

主になりがちですが、話せるようなら、なるべくこどもから話を聞くようにしています。

プライベートでは多忙でなかなか趣味が持てなかったのですが、運動しないとまずいと考え、自転車を始めて半年になりました。いろいろな職種の人と知り合いになれてとても良い気分転換になります。あと、この原稿の締め切り直前に富士山に登りました。5回目ですが、これからも続けていきたいと思っています。

取り留めもない内容でしたが、こんな動機の開業医もいるんだ、といった参考になればと思います。最後に、これからも讃樹會のますますのご発展をお祈り申し上げます。



「あっと言う間の24年間」

医療法人一進会河合外科・内科

河合 友子 (平成4年卒・第7期生)

讃樹會の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は7期生です。現在、同級生の主人(河合俊典)と岡山で医療法人一進会河合外科・内科、通所介護、小規模多機能型居宅介護を運営しております。

主人とは大学時代から常に共に戦っている戦友です。河合外科・内科は主人の父が開業し、間もなく五十周年を迎えます。地域に根ざすことを大切にしており、町内のイベントには、職員も一緒に参加しております。町内のお花見や夏祭りでは焼き鳥を焼き、芸をします。ソフトボール大会、運動会の参加、餅つき大会でのお手伝いなど一年を通して頑張っています。二人の娘達も地域にとけ込むため、小学校は地元の小学校に通いました。子供会に入り、子供会やPTA役員も主人と二人頑張りました。地元の高校の検診に行くと、「〇〇ちゃんのお母さんが来てくれたのね。」と言ってくれます。

娘達が保育園に通っている頃、突然の高熱や嘔吐下痢症などの病気になると、どんなに突然でも高松から

始発のマリンライナーで母が助けに来てくれ、私は仕事を一日も休まず続ける事ができました。娘が岡山大学に1週間入院して手術した際も母が来てくれ、母と付き添いを交代して仕事に行ったのが、今となっては懐かしいです。

今も仕事と家庭を両立させることに奮闘していますが、参観日や卒業式などは出席できません。その代わりに、毎日のお弁当と食事作り、塾のお迎えは娘達のため手を抜かず気持ちをこめて続けています。毎朝5時に起きて娘達のお弁当を作ります。8時から19時までは毎日の外来診察と老人ホーム、特別養護老人ホームの往診などの仕事です。たいした事は何も出来ないのですが、患者さんの気持ちに寄り添えるように努め、「ここに来たら、安心ね!」と思って頂けるように、一期一会の精神で医療と介護に取り組んでいます。

今まで学ばせて頂いた岡山大学病院、中国中央病院、岡山赤十字病院、岡山県健康づくり財団附属病院にも香川医大の卒業生の先生がおられ、温かくご指導して頂きました。今、周りを見渡しても、沢山の香川大学卒業の先生方がおられ、助けて頂き、感謝しております。

19時に帰宅すると、そこから夕食作り、翌日の食事とお弁当の下準備、塾の迎えと続きます。娘達は部活動(バレーボール)も終わり、中3、高3の受験生です。姫路にいる同期の清元加代先生が「いつかは作らなくても良い日が来るよ。お弁当を作れることを有り難いと思わんといけんのよ。」と言ってくれました。確かに、どんな事もいつか終わりが来る。お弁当作りも、子育ても、仕事もやりたくても出来なくなる日は必ず来るのだから、今出来る事を、精一杯やりたいと思えて来ます。

ある日曜日、主人と二人で10年ぶりに京都に行ってみようと思いつき、京都のとある路地で道に迷っていると、向こうから綺麗な女の人に来て、「あれ？友ちゃん？」と声をかけられました。それが、清元加代先生だったのでびっくりした事がありました。高校でも同じクラスでずっと一緒だった加代ちゃん、桃ちゃんは一生の宝です。何か運命を感じました。この文章を書いている当にその時に、同期の上原篤子(旧姓桃井)先生から電話があり、子育ての話で盛り上がりました。大学時代も出来の悪かった私ですが、出席番号が隣の現在法医学教授の木下先生にテストもポリクリも助けられ、無事卒業をすることが出来ました。木下先生をはじめ、同期の先生達に感謝の気持ちで一杯です。

あっという間に卒後24年がたち、知識が失われていくばかりです。新しい薬をなかなか覚えられず、焦っていますが、「先生に会えたら元気になります!」「ここに来たら、楽しいわー。」と言ってくくださる、おじ



娘達と一緒に

いちゃん、おばあちゃんの言葉を全て素直に受け取り心の栄養剤にしています。

認知症専門の先生が「認知症を防ぐことは出来ないけど、唯一運動だけは効果があるそうです。」と、言われたので、職場では皆で運動を心がけています。マラソン部、バドミントン部、登山部、ヨガ部があり、主人はマラソンを走り、私はヨガをまったりしています。

出来る事をコツコツ絶え間なく続けて、これからも主人と職員と一緒に歩いて行けたらと思っています。最後になりましたが、大変お世話になった全ての先生方、一進会の職員、そして家族に感謝するとともに、讃樹会の皆様の益々の発展を祈願して、筆を置きたいとおもいます。



主人と二人で

更なる野望のために

小林耳鼻科醫院

小林 英治 (平成9年卒・第12期生)

出身地である九州をあとして香川県に移ったのは1988年の4月でした。28年が過ぎました。その間、留年あり、国試浪人ありで順風満帆とは言い難い前半期でした。もちろん、勉強以外のことに労力を費やしました。このことが現在において私の財産になっていることを実感する今日この頃です。

学生時代はテニス部と軽音楽部に所属していました。開業して3年が経ち、経営も軌道に乗ったため、今年から屋島テニスクラブでスクールに通っています。主には体力増強、ダイエットが主たる目的です。一方で、10歳で始めたギターも老化防止として継続しています。こちらは2年前から、フラメンコギターのレッスンに通っています。おそらくテニスは70歳くらいまでは続けようと考えていますが、50歳が視野に入ってから体力の衰えは顕著で能動的に運動をしないとあらゆる身体的機能低下を防止できないと実感しているがゆえです。日常の外来診療はほとんど体を動かすことなく、半径5メートルの行動半径で完了する業務のため体は衰弱する一方ですから。ギターは老化防止にも有効ですが、人前でも演奏できる程度の技術は維持したいというのが本音です。はじめて、プロに師事してちゃんと学んだことはこれからの音楽ライフにとっても影響しそうです。後述する余生にとっても布石となるでしょう。

大学関連病院勤務時代はライフワークである嗅覚臨床の研究のため、コンスタントに学会発表をこなしてきました。毎年国際学会でも発表し、そのことが日ごろの臨床に還元されることを実感してきました。漫然と日常外来を行うばかりではむしろ診療レベルは低下するというのが持論です。開業後も電子カルテの特性を生かし、臨床データをまとめて学会発表を継続したいと考えています。そのために、来年春から臨床検査



院内待合室にてスタッフと一緒に

技師をスタッフに迎える予定です。耳鼻咽喉科は聴覚・平衡感覚・嗅覚・味覚といった感覚器を診療対象としており、聴力検査・平衡検査・嗅覚検査・味覚検査などの感覚器検査に加えて、内視鏡検査や鼻汁好酸球検査など多種にわたって臨床検査を駆使します。他にも当院ではスギ・ヒノキ花粉飛散測定も行っており、看護師にすべてを任せると敬遠されるのは当たり前の状態です。そこで、検査を一括して臨床検査技師に任せる事であらゆる臨床データを統括できるようにしたいと考えています。うまく軌道に乗れば勤務医時代以上に学会発表ができることになるでしょう。来年には久しぶりの国際学会発表も計画中です。おそらく、今後も臨床研究を続けることで診療レベルを維持することが地域医療に貢献する自分の方法だと信じています。

しかしながらそうしたスタイルも長期間継続することは困難と思われます。現時点での自分のイメージでは60歳を超えるとモチベーションも低下してくるだろうと予想しています。その際には、出来れば後任を探して徐々に仕事を減らすことも考えています。モチベーションが続く限りは頑張りますけど。そして、余った時間で文化的活動をしたいというのが余生?の目標です。そこでギターを含めた音楽をツールにした

何かができればと考えています。

日ごろの外来業務を行いながら思う事は、医学以外の経験がいかにか外来業務に役に立っているかということです。もちろん、留年したことや、浪人したことの言い訳にするつもりはありませんが、これらの事が悔やまれたことはありません。親には申し訳なく思っています。留年中、浪人中の体験（新聞配達・建築資材運搬・テニスインストラクター・ガソリンスタンド勤務など）はすべて診療に活かされています。唯一悔やまれるのはもっと勉強しとけばよかったということ。よく考えるととても矛盾しています。勉強してれば留年しなかったでしょうから。だからこそ、今からでも勉強して医療人として社会に貢献したいですね。最終的には医師としても遊び人としても堂々と胸を張れる人生が目標です。



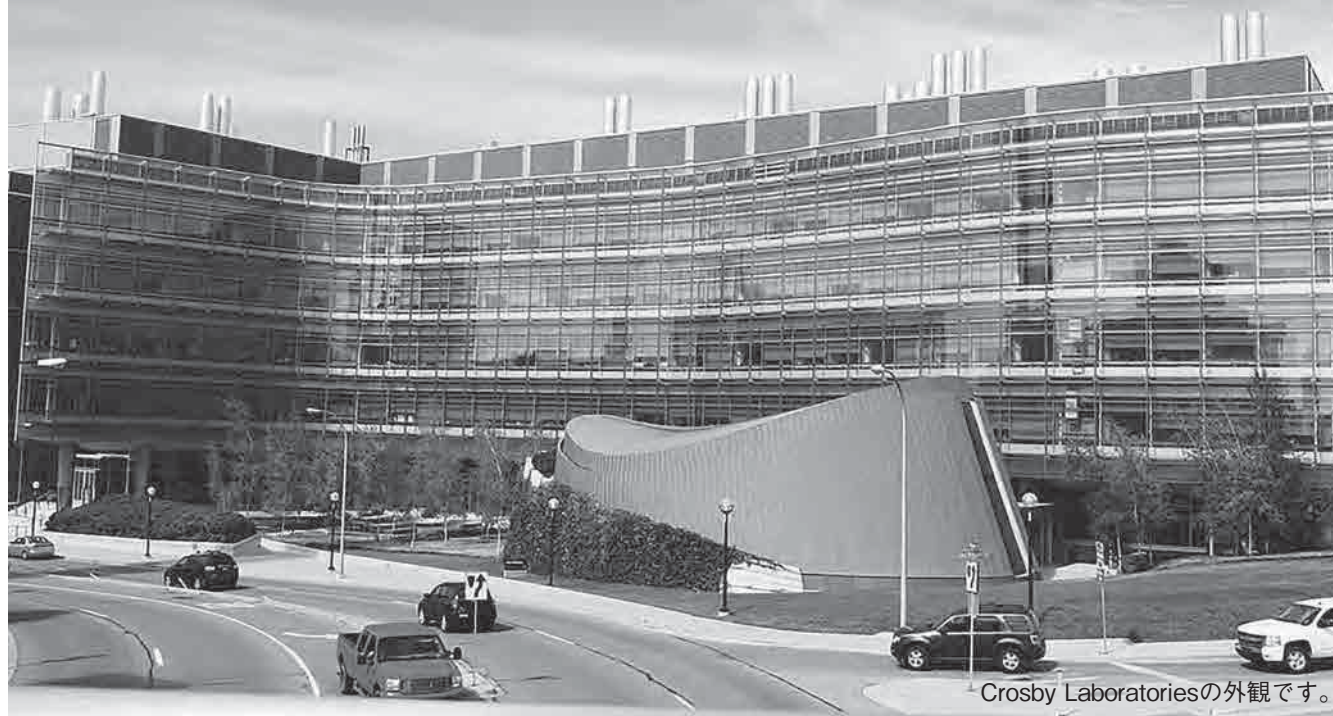
フラメンコギターを習得のために購入。



国外留学助成金留学レポート

ミシガン大学での留学レポート

穴戸 肇 (平成16年卒・第19期生)



Crosby Laboratoriesの外観です。

この度平成25年第1回讃樹會国外留学助成金の援助を頂き、平成25年6月から平成27年3月まで約2年間ミシガン大学に留学する機会に恵まれましたのでここに報告させていただきます。ミシガン大学はアメリカ中西部、およそ北緯42度の地点に位置する人口約11万人のミシガン州アナーバーという都市にあります。アナーバーはその人口の8～9万人が大学関係者で占めるという学園都市です。日本との時差は13時間から14時間で、日本とコンタクトを取るときには夜中に電話をする必要があります。スポーツ、音楽・美術関係が盛んであること、ミシガン大学病院を中心に医療設備が全米でも高い評価を得ていること、凶悪犯罪がほとんど起こらないことなどから2007年の“Best Place to Live”ランキングでは全米で5位に選ばれ、米国内でも“住みやすい町”としての評価を受けています。私が在籍しております香川大学脳神経外科講座とミシガン大学は非常に親交が深く、多くの諸先輩方が留学されている場所で今回、私で10人目の留学生となります。

私が在籍していたのはミシガン大学のCrosby Neurosurgical LaboratoriesでRichard F. Keep先生を中心に特に脳出血モデルで数多くの論文を世に出し

ております。私はそこで脳出血後の鉄代謝の権威であるGuohua Xi先生のご指導のもと研究をさせていただきました。私の主な研究テーマは(1)クモ膜下出血(SAH: subarachnoid hemorrhage)と(2)脳室内出血(Intraventricular hemorrhage)でした。日常の業務ですが、朝7時半頃に出勤し、月水は1日中手術をしていました。火、木はMRI検査及び実験をします。毎週金曜日はXi先生に1週間の進行状況を報告し、次の方針を立てます。月曜日は朝8時からjournal clubという抄読会があります。持ち回りで大体1、2ヶ月に一度回ってきます。英語のプレゼンテーションの練習にもなりました。以下に研究成果を簡単に紹介させていただきます。

クモ膜下出血後の急性水頭症に性差があるか

くも膜下出血(SAH)後の急性水頭症は予後不良因子の1つです。また女性はSAHの好発因子であるが、基礎研究において、SAH急性期の性差を検討した報告は少ないです。今回、ラットクモ膜下出血モデルを作成し、動物用MRI検査を用いて、SAH後の急性水頭症に性差があるか検討しました。今回の検討ではSAHの重症度、脳室内出血量に有意差がないにも関わらず、脳室拡大率、水頭症の頻度に性差を認めま



多くの良き指導者、同僚に恵まれました。

した。さらに組織学的精査を行いました。残念ながら両者に有意差を認めることはできませんでした。この結果はshort paperではありますが、Brain edema meetingで発表させていただきました。

ラットクモ膜下出血を用いたMRIによる重症度評価

ラットクモ膜下出血モデルは主にendovascular perforation model で作成します。この手法はよりヒトSAHと病態が酷似した状態ではありますが、SAH model の重症度にばらつきが強いことが問題であります。SAH の重症度にばらつきが出る理由として、Endovascular perforation method は出血量をコントロールすることができないためです。この欠点はCurrent SAH severity grading により補うことはできますが、この評価は摘出した標本の頭蓋底の出血量を評価基準としているため、モデル動物を安楽死させる必要があります。結果、重症度に応じた中長期評価ができません。今回MRIによるSAHの重症度評価を試みました。結果ですが、画像評価で脳室内の出血の有無及び subarachnoid clot の厚さを基準に評価、分類することでヒトSAHの重症度分布と同様の傾向を示し、かつ以前から使用されている重症度とも強い相関性があることを証明し、MRIによりモデルを生かしたままSAHの重症度分類ができるようになりました。今後のこの結果を用いて重症度に応じて比較検討を中長期で行うことができるようになり、SAH病態解明にさらなる検討ができるようになります。この結果はJournal

of neuroscience methodsに掲載させていただいております。

脳室内出血後の急性水頭症とLipocalin 2との関連

脳室内出血は水頭症の発生に深く関与しておりますがまだ十分な解明ができておりません。Lipocalin 2は鉄代謝に関わる蛋白として知られておりますが、中枢神経系においては神経炎症にも関与しているのではと言われております。今回Lipocalin 2ノックアウトマウス脳室にヘモグロビンを投与し、脳室内出血後の急性水頭症とLipocalin 2との関連について検討しました。結果ですが、脳室内出血後Lipocalin 2ノックアウトマウスは脳室拡大を呈することがなく、脳室壁の組織学的検討では神経炎症が野生型と比べて有意に抑制されていることを証明しました。Lipocalin 2が脳室内出血後の神経炎症に深く関与し、脳室拡大の原因の1つである可能性を示唆しました。この結果はStroke and vascular neurologyに掲載していただきました。

留学はこのような研究だけでなく異国の地で日本ではできない様々な経験をさせていただきました。何より臨床の現場を離れた生活であるため週末や休日の休みをしっかりと家族で満喫できることが非常にありがたいことでした（写真1-5）。

公私ともに恵まれた環境で生活でき、素晴らしい経験をすることができました。最後になりましたが、このような貴重な留学の御支援頂きました讃樹會同門の諸先生方に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

公私ともに恵まれた環境で生活でき、素晴らしい経験をすることができました。最後になりましたが、このような貴重な留学の御支援頂きました讃樹會同門の諸先生方に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

学 生 の 短 期 留 学 報 告



6年 滝澤 亜矢

チェンマイ大学 3/22~4/17

①学習状況について：チェンマイ大学医学部産婦人科において、約1ヵ月間実習を行った。実習は、婦人科病棟、産科病棟、婦人科外来、産科外来に分けて行き、それぞれ手術、回診、外来の見学を行った。午前は毎朝7時からmorning conferenceに参加し、その後見学などを行った。午後は手術や外来がないときにはjournal conference、interesting case conference、subspecialty conferenceに参加した。回診や外来は見学が中心で、患者と医師の会話はタイの言語で行われ



▲手術室では腫瘍の手術や帝王切開を見学しました

るため、診察の合間などに医師や学生に英語で説明をしてもらった。手術室での手術や帝王切開の時には、見学だけでなく手洗いをし手術に入らせていただくこともでき、解剖や治療の理解が深まった。また妊婦健診外来では、多くの患者でレオポルド触診法、子宮底長の計測、ドプラーを使った胎児心音の聴取を行わせていただいた。その他にもコルポスコーピーなど日本での実習では見たことがなかった産婦人科特有の診察や検査を多く見学でき、疾患や治療の理解につながりとても勉強になった。また医学英語も始めは聞き取ることが難しかったが、だいたい慣れることができた。疾患名や検査などの英語は日本で学習していたが、病態や、特に婦人科の専門外来の分野は不十分だったため、外来見学に行く前に英語のテキストを借りて学習し説明を理解できるようにした。しかし、疾患の定義や病態の説明を求められると英語でうまく説明できないことが多く、今後さらに学習が必要だと思った。

②生活状況について：寮は病院の敷地内にある医学部

の女子学生専用の寮を使わせていただいた。産婦人科の病棟まで徒歩で約5分の距離でとても近く、病院の敷地内にはスーパーマーケットやカフェやレストランもあるためとても便利だった。また敷地内の建物には食堂や売店もたくさんあるため、生活面に不自由はなかった。私が滞在した期間が、チェンマイ大学の学生のテスト期間や長期休暇期間にあたってしまっていたため、チェンマイ大学の医学生と話すことがあまりなかったのが残念だったが、医師や看護師など多くの方々を毎日食事や観光に連れて行って下さり、多くの人と交流したりタイやチェンマイの文化を経験したりすることができた。

③後輩へのアドバイス：学生のときに海外の医療や医学教育を経験することによって、自分や日本の状況を客観的に知り、またその国の医師や学生などからも学びたいと思ったことが留学を希望した理由の一つであった。実際に、日本の実習では見たこともなかった検査や診察など医学的な経験ができただけでなく、チェンマイ大学の学生を見て学習に対するモチベーションが向上した。またタイや他の国からの留学生との交流によって医療や医学教育の違いを学ぶこともでき、日本にいただけでは得られなかった多くの経験をこの留学によってすることができた。またこの留学では自主性や積極性も学ぶことができた。日本の実習と



▲観光にもたくさん連れて行っていただき、タイの文化をたくさん経験できました(写真はWat Phra That Doi Suthep)

は異なり自由な形式の実習であったため、どこで何を学びたいのかを明確にしてそれを自分から伝えたり質問をしたりするなど自主性をもって学ぶ姿勢を得ることができた。これらの経験は勉強面だけでなく今後の進路などにも影響するような貴重な経験であり、海外研修への参加を多くの人に薦めたいと思う。

④その他：出発する前は、自分の英語力の不足や1人で行くことから不安がとても強かったが、チェンマイの方々はとても親切で、多くの経験もでき充実した生活を送ることができた。この留学で得たことを、今後の学習や将来医師として医療に携わっていく中で生かしていきたいと思う。



平成28年3月14日より3月18日にかけて4泊5日の日程で、中国河北省の河北医科大学への訪問を行った。河北医科大学は、北京市のすぐ西にある石家荘市に存在する医科大学である。香川大学医学部からの学生派遣は2012年以來の再開という形であった。

学習状況と生活状況を踏まえながら、5日間の成果を記す。

3/14 教員と生徒一緒に、松山空港より、上海を経由し、国内便で石家荘空港に20:30頃到着。張景坤所長と那佳通訳に迎えられ、ホテルのレストランで沢山のチンタオビールと共に食事をした後、大学内の外国人招待所に到着。部屋はかなりきれいで、キッチン等もあり、短期間の留学宿泊先としては豪華すぎるぐらいで、相手方の歓迎の気持ちがまずとても伝わった。

3/15 崔学長らによる歓迎儀式から始まった。崔学長、任部長、田部長による接見が行われ、双方の代表による表敬演説と記念品の交換が行われた。厳かな雰囲気で行われると思いきや、相手方の先生達が日本への留学経験があるらしく、かなり日本語を上手く話され、僕達に対しても和やかに接して下さり、とても話しやすかった。その後は、生理学や薬理学の研究室を、その分野の先生と回り、生理伝達物質の器官活性、心筋細胞のカルシウムチャンネル等について実際研究をされてる所を見た。先生の解説は全て英語で、専門的な用語も多いため、聞き取るのはかなり難しかった。中国では、一つ一つの研究課題に対して国からの援助金が出るらしく、手広く研究を広げるより一つの研究

に金や努力を注ぐ方が成果が得やすいといったような、中国での研究事情も話して下さった。

午後は、中国医学の現状について任教授より解説を受けた。中国では医科大学に入学する時に、中国医学専攻、西洋医学専攻に分かれ、西洋医学専攻者は東洋医学を一切学ばないらしい。中国では、毛沢東時代、彼により東洋医学の学習、利用が推し進められたが、今はあまり東洋医学は西洋医学に比べ信用されていない世論が多いらしく、日本の方が、東洋医学を学ぶ現状になっているらしい。しかし、河北医科大学では、中西医とって、レントゲン等西洋医学の理論的検査の上で、東洋学的治療を行うといった東洋医学、西洋医学の融合が果たされていて素晴らしかった。

夜は崔学長らと共にとっても豪華な晩餐会が行われた。とても先生と生徒の間の距離感が近い楽しい会となった。先生が生徒と友達のように近づいて沢山話をしようという気風が感じられる会であった。

3/16 病院で、鍼などの東洋医学を実際に体験し、中国医学に対する理解を一層深められた。午後は、中国の学生と交流会が行われた。2時間ほど会話等をして交流を図った後、練習をしてきた芸をお互い出しあった。こちらは、空手の型を披露した。練習期間が短く未熟ではあったが、やる気と楽しませようという心意気で頑張っけて乗り切った。芸の成熟度も大事だが、そのような気持ちも相手に伝わるものだと思った。

3/17 病院で、外科手術を見学後、田教授から医学教育について説明を受け、その後、インド人と医学教

育等について議論等をした。

3/18 河北博物館に行き、燕、趙等の時代についての資料を見て、河北省の歴史を学び、プログラムは最後となった。

【感想】

中国は共産主義国であるし、政治的にも日本とは対立していることも多々あり、イメージとしては中国人は日本人を忌み嫌っていると思っていた。しかし、実際に行ってみると、個人レベルとしては日本人をなにもなしに嫌う人は、僕の会う人の中では一人もおらず、かなり親切にしてくれる人が多かった。中国の田舎は事情が違うのかもしれないが、このようなことを知るには、現地に実際に行かなければわからないものだと思った。

留学は、学習上の知識等の獲得も確かに大事かもし

れないが、全く新しい人と実際に会い、そのような人に対する偏見が取り払われ、また、新しい価値観を獲得できるというメリットの方がかなり大きいように思う。香川大学で更に色々な国への留学が行われるよう願うし、そのサポートも僕はしたいと思った。

【アドバイス】

- ・とりあえず行ってみる。行ってから考えればよい。
- ・意思伝達は、手記等を使えば絶対になんとかなる。
- ・しかし、中国語が少しでも話せれば、相手はとても喜ぶ。
- ・お金に関しては、援助金が出るので問題ない。
- ・医学部は交流が狭くなりがちなので、海外の人と密接に関わるのは、とても有用。
- ・芸は、やる気と熱さを見せるのが一番大事。



① 学習状況について

2016年3月14日から27日の2週間、National University Hospital Singapore (NUHS) で病院見学をさせていただきました。今回僕が訪れたNUHS や National University of Singapore (NUS) は香川大学の協定校ではなかったのですが、徳田副学長からNUHSの外科部長であるProf. Lee Chuen Nengにコンタクトをとっていただき、幸運にも、僕の見学が受け入れられることになりました。そのため僕のプログラムはElectiveとは異なる特殊なもので、最大2週の期間で、外科部門から1つの科を選択することができるというものでした。今回、僕はCardiac, Thoracic and Vascular Surgeryを選択し、見学をしました。

見学期間中はCardiac SurgeryのProf. Kofidisのチームにいらていただき、手術見学を主とし、カンファレンスやクリニックも見させていただきました。Cardiac Surgeryの手術件数は1日15件前後と、CABGをはじめ多くの手術を見学することができました。Kofidis先生から、とにかく手術をたくさんみて本をたくさん

読めとアドバイスをいただき、チームの手術がない空き時間には、先生に借りた心臓外科の本を読んだり、別のチームの手術見学をしたりしていました。

また、途中でKofidis先生がドイツに行ってしまったため、その後は一般外科のチームに混じって手術を見学しました。また一般外科ではNUSの医学生が臨床実習をおこなっていたため、彼らとともにチュートリアルに何度か参加させてもらうことができました。

② 生活状況について

NUSの中はいくつかの寮があり、何度か応募を試みたのですが、既に満室で寮に泊まることはできませんでした。そのため僕は、Clarke Quay MRT stationから徒歩3分くらいのところにあるユースホステルに宿泊していました。NUHSはKent Ridge MRT stationの建物とつながっており、ホステルと往復の移動は所要時間約40分と、全く不便なく通うことができました。

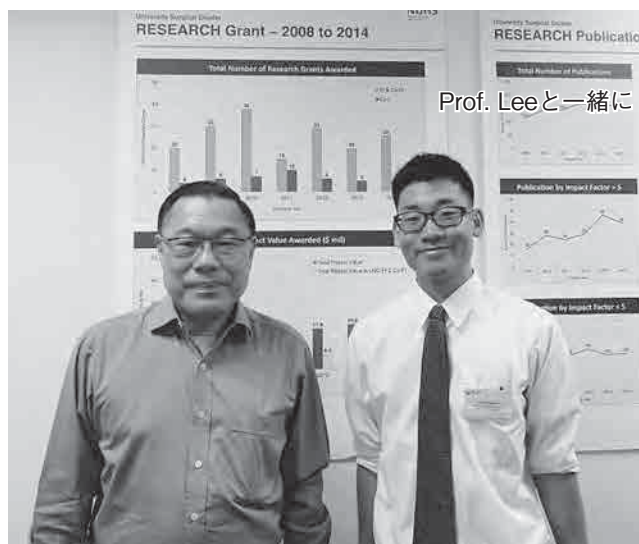
食事については、NUSの学食やNUHSの病院食堂を使うことができ、1食約3S\$ (260円) で食べることができました。また、カンファレンスがある際には

食事が準備されていたり、手術室の更衣室の隣のスタッフ用の食堂では無料で昼食が提供されていたりという環境が整っていました。

NUH, NUSやオフィスの建物内では、部屋の入室等に職員証、学生証が必要なことが多く、僕のプログラムではカードキーやPHSを借りることができなかったため、誰かが通るまで待つ必要がありました。特に手術をみていて夜遅くなってしまうときには、1時間以上身動きがとれないこともあり、苦勞しました。

③ 後輩へのアドバイス

NUHはシンガポールで重要な役割をもつ病院の1つであり、世界中の優秀な医師を集め、多くのローカルや他国からの医師、医学生が勉強しています。手術件数、医師数は非常に多く、多くの症例を学ぶことが



でき、学習環境も非常に整っていると感じました。

しかし、今回の僕のプログラムでは患者に触れたり、話しかけたりすること、学生の授業に参加すること等は禁止され、希望を聞いてもらえなかったり、特に事務手続きの面では適切な対応をしてもらえず、非常に苦勞しました。

僕のような特殊なプログラムの医学生は他におらず、他の国からの学生はElectiveとして正式に申し込みをしてきているようでした。香川大学医学部からも6年次にElectiveで正式にNUHの見学を行なうことができるため、そのほうが特に手続きの面では困惑せず、より良い環境で勉強できるのではないかと思います。



ニューキャッスル大学 4/11~5/20

6年 近藤 峻平

私は、去る2016年4月11日から、5月20日の6週間、イングランド北東部の都市、ニューキャッスル・アポン・タイン市（以下、ニューキャッスル）にあるニューキャッスル大学の附属病院（Royal Victoria Infirmary; IVR）にて臨床実習をさせていただきました。

ニューキャッスルはロンドンから約450km、イギリス国内でも中規模の都市で、イギリスの高松といった雰囲気のところでした。そのため、IVRでの実習は、都市規模が似ていることから、香川大学病院での臨床実習でみる日本の医療とイギリスにおける医療を比較しやすいというメリットがありました。

私は6週間のうち2週間ずつ、小児感染症科、感染症科(成人)、循環器内科を見学させていただきました。

IVRでの実習でまず感じるのは、医師も患者も人種的多様性に富んでいるということです。とりわけ医師はコモンウェルスからのトレーニングという形で働いている方が多く、患者はアフリカを中心に旧植民地からの出稼ぎが多く見受けられました。そのため、IVRの実習では、医師として求められる世界標準の知識、技術がいかなるものであるのかを学べ、また、日本ではまず見ない人種を考慮した医療を目にすることができました。例えば、肌が褐色の患者は、日照量の関係からビタミンDの欠乏に陥りやすく、そのような患者における結核の多剤併用療法は反応性が悪いということで、ビタミンDが処方されていました。鑑別診断においても、人種によって疾患の発生頻度は異なるため、チューターからの質問では、「それは、どの人種に多

くみられるのか?」ということを頻繁に尋ねられました。

イギリスはパブの国です。町中いたるところにパブがあり、老若男女、酒を飲んで語り、騒ぎ、夜のひと時を楽しむ光景をよく目にします。ニューキャッスルもご多分にもれず、駅の周辺を中心に数多くのパブがあり、実習終わりに友人と誘い合ってパブへ行き、気晴らしをしたのがいい思い出です。週末は、イングランド北部を中心に各都市を観光して巡りました。平坦な大地に草地が広がる光景は非常に牧歌的で美しいものでした。それと同時に日本から遠く離れた異国に来たことを感じ、強く郷愁を誘いました。私は4年次にブルネイでのSummer programにも参加させていただいたので、スコットランドのグラスゴー大学やアイルランドのトリニティカレッジに留学中のブルネイ人の友人とも再会を果たすことができました。将来イギリス留学を視野に入れている後輩には、ブルネイでのプログラムにも参加し、イギリス、アイルランドに事前にネットワークを張っておくことを強くお勧めします。友人との再会というのは本当に印象深く、よいものです。

イギリスの医療は、日本の医療と比較して格別発達しているわけではありません。外科手術は日本の方がより丁寧で精確な印象をもちますし、内視鏡治療や画像診断においては、日本の医師の方が確実に高水準です。それゆえ、「イギリスに行ってより高度な医療を学ぶためにこのプログラムに参加する」というのは成立しません。だからこそ、イギリスで何をしたいのかを明確にすることがとても大切です。「日本と同水準の医療が行われる先進国へ、いったい自分が何を求めて行くのか」ということに対しての回答の無いまま、ただ闇雲にイギリスへ行っても、実習の学習効果は低いでしょう。

また、実習の間は患者さんや医師のネイティブスピードの英語を解さないといけないため、高度なリスニング能力が求められます。とりわけニューキャッス



Royal Victoria Infirmary (RVI) の中庭にて
Dr.Schmidとともに
(左から半山、西川、Dr.Schmid、近藤、藤井)

ルは、イングランドの中でもアクセントの強い地域ですので、なおさら聞き取りが困難です。英語は読み、書き、リスニング、スピーキングをまんべんなくトレーニングすることが大切とはいいますが、何はともあれまず、リスニングのトレーニングです。日々英語を耳にする習慣をつけることが肝要であると思いました。

最後になりますが、このような貴重な機会を提供して下さった関係各所に感謝申し上げますとともに、資金面での補助をしてくださる讃樹會に深く御礼申し上げます。私の6週間の経験が少しでも香川大学医学部の発展に貢献できるよう精進してまいりたいと思っています。



グラスゴー大学 3/30~4/29

6年 西本真由子

① 学習状況について

グラスゴー大学医学部が実施する4週間の選択制臨床実習で、学生1人につきスーパーバイザーとなる医師が1人つき、実習の調整や学生の評価を行う。私は産婦人科を選択し、産婦人科専門医のDr. Mahesh PereraのもとでGlasgow Royal Infirmaryを中心とした様々な医療機関で実習を行った。実習内容は多岐にわたり、外来診察（総合婦人科・更年期・女性泌尿器科・性感染症・子宮鏡・婦人科腫瘍・妊婦健診・多胎妊娠・不妊治療）、病棟（産科・婦人科・新生児科）、手術（一般婦人科疾患・婦人科腫瘍・帝王切開など）、また不妊治療施設での採卵・卵管造影の処置見学などがあった。さらに、MDT (Multidisciplinary Team) meetingやグラスゴー大学医学部の研究発表会などにも出席した。

留学中に最も難しいと感じたことはやはり臨床英語で、初めはわからないことがある度に医学の知識と合わせて学習する必要があった。しかし実際の医療現場では1つの疾患に関する様々な語彙や表現方法を医療者側と患者側の両方から同時に聞くことのできるため、効率的に実用的な臨床英語を学ぶことができた。

② 生活状況について

実習は平日のみで、朝7時半に出発し大体夕方6時前後に帰宅するといった生活だった。昼食は病院内に売店や食堂があるものの、実習あるいは病院間の移動などでまとまった時間がとれることは少なかったため、毎朝サンドイッチを作ってフルーツなどと一緒に持って行くようにしていた。実習先へは電車やバスを使ったり、Dr. Pereraが通勤する車に同乗させていただいたりして通っていた。

平日の実習後や週末は実習で知り合った友人とグラスゴー市内で買い物や食事をしたり、博物館などの観光名所を訪れたりした。また、スコットランド内の別の都市やロンドンへ観光にいった週末もあった。

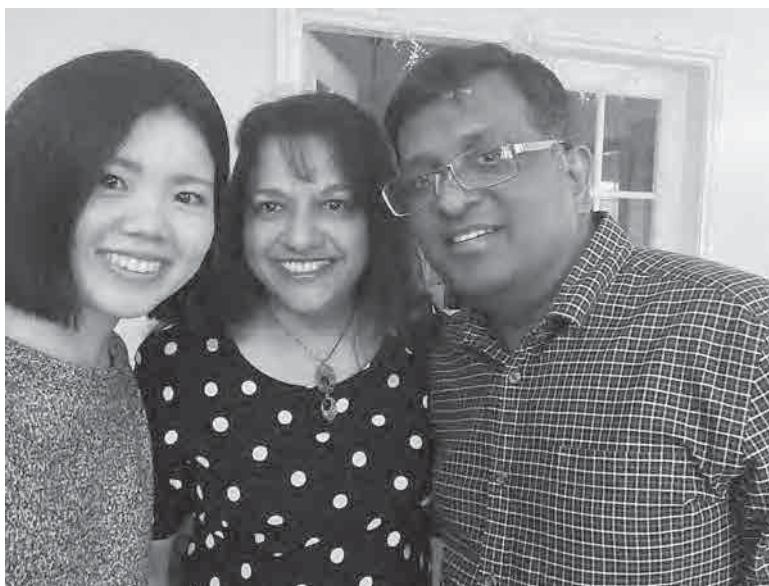
③ 後輩へのアドバイス

留学の目的はもちろん臨床実習だが、それ以前に異なる言語、新しい人間関係、慣れない文化・慣習といった環境の中に適応し生活するということがまず求められる。そのため、個人的には医療スタッフや患者さんなどの現地の人とのコミュニケーションをうまくとることが最も重要なことだと感じた。

④ その他

留学でお世話になった医師や助産師、看護師などの医療スタッフはもちろん、私を快く受け入れてくださった多くの患者さんたちに感謝の気持ちでいっぱい、彼らのおかげで非常に充実した臨床実習となった。

最後に、私のこの留学での最大の収穫はスコットランドと日本の医療現場における違いを多く経験できたことだと思う。私がこれまで日本で作り上げていた常識はスコットランドで何度も覆されたが、それは同時にそのことの本質について考える機会となり、興味深く感じた。これから医師として新しいことを学び成長していく上で、より幅広い視野で医療を本質的にとらえることができるような人でありたいと考えようになった。



With Dr.Perera and his wife Rosanne

「創部ものがたり」

ラグビー部 編

ラグビー部OB会名誉会長 津川 猛士 (昭和63年卒・第3期生)

私が入学した昭和57年(当時香川医科大学)には、既に運動部と文化部を含めて相当数のクラブは創部されていました。1期生はエネルギッシュで優秀な人材が多く、ラグビー部も初代顧問の佐藤忠文先生(生物学教授)の下、花田浩主将(1期生)を中心に創部されていました。しかしながら正式部員は5名程度であり、ラグビーは最低15人のメンバーを必要とするため、人数確保や練習も大変で、香川大学(本学)のラグビー部に練習指導をお願いする等、かなり苦労したとのことでした。我々3期生は経験者を含め、当初6人が入部したのですが、人数不足の解消とまではいかず、陸上部など他の運動部からの応援を貰って、何とか試合ができる状況でした。

練習日は水曜日と土曜日の午後からの週2回程度であり、参加人数も少なく、効果的な練習ができない状態が続きました。当時、四国では徳島大学や愛媛大学は結構な強豪校で、西医体でも好成績を納めていたので、練習試合を行っても、まったく歯が立たない相手であり、唯一のライバルといえば同じく新設大学であった高知医科大学(現高知大学医学部)くらいでした。

創部4年目の西医体に参加した時のことでした。夏の7月、対戦相手は徳島大学で徳島県吉野川河川敷での試合でした。当時香川医大のラグビージャージがオールブラックに似せた生地 of 分厚い上下黒色だったので、猛暑の中、太陽の熱を吸収してしまい暑くて立っているのがやっとで、熱中症の一步手前の状態でし

た。また笑い話のようですが、ジャージの数が人数分無かったので、増田和久(4期生)は黒色なら良いだろうと、黒いトレーナーに手縫いしたゼッケンを付けて出場しましたが、試合が始まるや否や、トレーナーの生地が柔らかくて首元は伸び、ゼッケンは破れ、本当にボロボロの状態になってしまいました。加えてチーム一の俊足でポイントゲッターである岩田修(3期生)が大腿部の肉離れを起こしてしまい、走るのはおろか歩くのもやっとの状態で、とても試合どころではなく、点数差も覚えていないくらい大敗しました。

創部当時のラグビー部が元気だったのは飲み会くらいだったのですが、そんなラグビー部が変わっていったのは5期生が入部した頃からでした(写真1)。秋の大学祭の打ち上げはラグビー談議で盛り上がり、何としても勝ちたい、西医体でも好成績を残したいという異様な雰囲気になっていきました。



写真1 昭和59年頃5期生入部後の西医体合宿(神鍋高原)にて/筆者:前列右より3人目



写真2 関西医歯薬大会

それからと言うもの、部員集めに奔走するとともに、練習量も各段に増えていき、毎日の練習に加えて、毎週日曜日に社会人クラブチームとの試合を組むなど、ラグビー漬けの生活になっていきました。7期生が入部する頃には、小柄だったフォワードも大柄化し、スクラムでも押し負けないようになり、信じられない事に四国電力や自衛隊等の社会人チームに勝ったこともあり。また四国医学部対抗戦でも、強豪愛媛大学にワントライ差に迫るまでに強くなり、3期生の卒業直前の試合では、遂に愛媛大学にも勝利しました。更に関西医歯薬大会にも参加することになり、平成3年には2大会連続で3位になるなど、輝かしい成績を残しました(写真2、3)。

OB会は発足して25年を越えましたが、毎年9月に高松でOB会総会、懇親会、交流戦が定期開催されており、OB同士のみならず現役との交流が行われてい

ます。2010年には20周年記念大会として、讃樹會の援助の元、一般参加の特別講演会も開きました。この時には初代顧問佐藤先生のご尽力で、「スクールウォーズ(2001年TVドラマ、2004年映画化)」の主人公のモデルとして有名な山口良治先生(元伏見工業高校監督)に講演して頂くなど、大盛況の記念大会を開くことができました(写真4)。

最後に残念ながら故人となった忘れられない2名の部員について述べたいと思います。島田啓(3期生)と五味淳(14期生)です。島田啓は、ラグビーは未経験ながらボクシング等の格闘技が大好きで、その優しい顔立ちからは想像できない闘志の持ち主でした。入部後間もなく出場した練習試合で負けてしまった時には「くそー」の怒声を風呂場のドア越しに聞いたこともあり。対して五味淳といえば、何ともひょうきんな味のあるのが印象的な、周囲の部員達をなごませる選手でした。彼らの存在があったからこそ、現在のラグビー部に繋がる活動ができたことは紛れもなく、感謝の気持ちでいっぱいです。

以上、ハチャメチャで始まった創部物語ですが、今後の現役部員達の頑張り、好成績を残して欲しいという強い思いとともに、筆(ペン)を置くことにします。

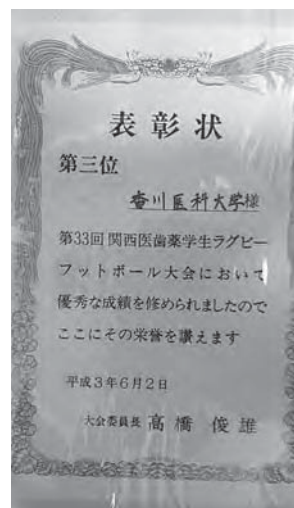
写真3 関西医歯薬大会
3位入賞賞状

写真4 OB会20周年記念講演会 山口良治先生

「10年後の私」の10年後

めぐりあわせ たどりついた高知より

三愛病院 形成外科

三好みちよ (平成11年卒・第14期生)

人生とはわからないものである。「10年後の私」を書いたあと、医局は再び教授空席となった。予想外の展開だったが、色々な方にお世話になり、どうにか専門医となった。前回「私の経歴は2～3年のサイクルで移り変わっている」と書いたが、同じサイクルで教授が移動されるなどなかなかない事だと思っている。そして、医局の先生方はその度に人生の選択をされたことと思う。これからの形成外科医局の益々のご発展を高知より願っております。

さて、「10年後もアンチエイジングに携わっているだろう」と希望的予測をしていた私は現在高知でその仕事をしている。そこにたどりつくまでにはいくつかの転機があった。その病院は当時高知から香川に高速バス通勤していた私の通勤路にある。良さそうな病院だな、と思っていたところ偶然当時の副院長から夫を通じ勤務の話があった。そして、育休明けから香川勤務のかたわら高知で皮膚外科医としてのスタートを切った。当初は手術で有鉤鑷子が使われていなかったり、手術室で乳児検診とダブルブッキングなど戸惑いもあったが、手術の合間に見る副院長の診察はとても勉強になった。特に皮膚前癌病変の見極めはその後の診察で何度も役立った。そして、次の転機が訪れた。美容担当の先生が退職されるという。通い慣れた香川の病院を辞めるのはとても残念だったが、娘の入園で通勤が難しくなることもあり、私は完全に高知在住となった。高知県は東西に広いため前日泊をしての受診もある。こちらが気遣うと、高速があるので大丈夫です、との事。日本一狭い香川で仕事をしていたためか、スケールが大きいと感じてしまう。そして、雨風のスケールも大きい為少々台風のキャンセルがない。そんな無理しなくても、と言いたいが、アンチエイジングの世界は熱心な方が多い。そして前向きだ。たとえ骨折しても、今のうちにうんと白くなろうと思って、と足繁く通う方もいる。またある時は、こちらで一生活お世話になろうと思う、と言われまさか自分が、しかも美容でという驚きと、その言葉のおかげでここで頑張ろうと決意するきっかけとなった。

アンチエイジングにも色々あるが、私は初診時に遮光(過度の紫外線照射を避ける)の徹底をお願いしている。お肌の老化の80%は光老化によるものといわれているからだ。そして、遮光は前癌病変の発生予防につながる事も加えて伝えている。高知に移って感じた事に日差しが強い事と紫外線に関連した皮膚癌や前癌病変が多いという事がある。実際、高知県の皮膚癌の県別標準化死亡比は高い。遮光知らずの大きな濃いシミを診た時、遮

光の重要性とともに皮膚癌予防の必要性を感じる。それを美容の分野からでも伝えられればと思う。

数年後、今度は副院長が退職されることになり、病棟の褥瘡も担当することとなった。引き継ぎの褥瘡回診では、副院長の貫禄が半端なく、これを私がやるのかと思うと気が重くなった。考えた末、わかりやすい褥瘡委員会にしようと思った。そこで、夫考案の褥瘡アプリ(褥瘡ナビ)を導入することにした。このアプリ、項目や数値を入力するだけでDESIGN-Rが点数化され、写真をとると画像の横に点数表示もされ経過が一目瞭然なのだ。また、微量元素の測定と投与も行うことにした。皮膚細胞の培養をしていた頃、微量元素で細胞増殖能が上昇した経験があり、いつか何かに活かせないかと考えていた。まだ結論を出すには不十分だが、一定の効果ありという印象は持っている。これらは勿論私一人ではできない事で、メンバーに良き理解者がいてくれたおかげである。これも何かのめぐりあわせだろう。最後に10年前の私に一言。しみは遮光すれば戦う必要はありません。



香川大学医師会会報第17号誌(平成18年2月号)掲載分より



10年後の私

形成外科 三好みちよ

今回「10年後の私は…」というテーマでの原稿依頼をいただいた時、小学生の頃未来の自分に手紙を書いたことを思い出した。それは学校の行事で書いたものだったが、確か私は25歳で結婚をし、現在は子育てに勤しんでいるはずであった。職業は、姉が医学の道に進んでいた影響もあり医師と書いた記憶がある。子育て云々の件は除いて、多少の年齢のズレも大目に見れば私は大筋で小学生の頃思い描いていた未来の自分となったことになる。そういえば、私は小学生の頃から現実主義だったのだと改めて思う反面、一種の感慨もある。

現在私は卒後6年目の医師である。研修医2年目から大学院に入学し、手術を少しずつさせてもらえるようになり臨床が面白いと思い始めた4年目に研究分野に移行し、今度は、研究の奥深さを感じ、もう少し追及したいと思い始めたこの春に大学院を卒業し、再び臨床に戻った訳である。こうして私の短い経歴を振り返ってみると、2～3年のサイクルで移り変わっており、実際あっという間であった。当初“10年後”という時間が漠然としたものに思われたが、今までの経験から感じたことは、これからはもっと腰を落ち着けてじっくりと臨床なり研究に取り組みたい、ということだ。まさに10年というスパンは今の自分にぴったりなのかもしれない。

大学院では、薬剤徐放性の創傷被覆材の研究や皮膚細胞の培養をしていた。形成外科では熱傷や難治性潰瘍、褥創を扱う機会が多く、薬剤徐放性の創傷被覆材があれば頻回な薬剤投与なくして早期創閉鎖が期待できるため特に創部が広範囲な場合、その有効性が発揮されるのではないかと思う。大病院に広範囲熱傷が運ばれてくる機会が多い今日この頃これまでの研究をさらに発展させ、実用化させたいと強く感じている。一方、関連病院先で私は美容形成医に変身し、ケミカルピーリングをおこなっている。ケミカルピーリングとはフルーツ酸などの酸の作用で皮膚を一定の深さで変性させることにより皮膚の再生を促すもので、外来には10代から70代までのニキビやしみ、しわを悩みに思う方々が多く来院されている。特にしみは年を重ねれば必発であり、最近では女性だけでなく男性でも若返り(rejuvenation)を期待し除去を希望される。しみは、経過が長ければ長いほど頑固でなかなかすくならず、その人の歴史さえ感じられる。それだけに、ピーリングにより少しでもしみがうすくなった方の喜びも大きく、たかがシミ、されどシミなのである。しみは永遠のテーマであり、おそらく10年後も私はアンチエイジングの分野に携わってくるのではないかと思う。そして、まさに自分自身がしみと戦っているであろう。さらにこの分野で過去の細胞培養の経験がヒントになれば、と思う。

と、思うがままに筆を進めてきたが、こうして文章にしてみると10年後の自分が少しずつ見えてきたとともに、そのためにこれからどうしていけばよいかははっきりしてきたように思う。そして小学生の頃未来の自分に宛てた手紙のように、この原稿を10年後にもう一度読み返してみようと思う。最後になりましたが、この企画により真剣に将来の自分と向き合うきっかけを下さった方々、そしてこの原稿執筆の機会を与えてくださった井川先生に感謝します。

支部会・懇親会



軽音部OB会ライブ開催報告

～Night Of Hot Stuff Jazz Live Session!～

藤川 愛 (平成13年卒・第16期生)

オープニングは、現役軽音部生（部長の佐々木君達5名）の若さあふれるダイナミックな演奏に皆の期待も高まります。軽音部OB代表として山下先生からのご挨拶より「当時の軽音部Hot Stuffライブは国試直前の1月末に開催され、6年生も出演していた」という驚愕の事実を知り、諸先輩方の軽音ライブのためな



平成28年5月28日夜、香川大学医学部の軽音部創設以来のOB会ライブを初開催しました。音楽でつながる楽しさを全国の讃樹會OBの皆様と共有したくご報告します。

経緯は、皆さんもご存じのコウノドリモデルの荻田和秀先生（7期生軽音OB・りんくう総合医療センター産婦人科部長）による讃樹會記念講演会の同日夜、荻田先生も所属していた軽音部OB会ライブ開催に向け、県内外の軽音部OBが諸手を挙げて賛同したところから始まります。しかし過去の軽音部OB名簿は消失し、現在軽音部を指導する山下彩奈先生（12期生）と岡田真樹先生（15期生）のご尽力により復元され、無事開催に至ることができました。会場は、日本を代表するSAXプレイヤー渡辺貞夫氏ら著名なジャズミュージシャンも演奏し、藤井聡先生（5期生Pf）もハウスバンドメンバーという、ジャズ関係者なら一度は演奏したい高松SPEAKLOWでの開催です。（美濃店主様、ありがとうございます!）

ら国試もいとわない猛者ぶりが何えました…。

続いて、エスポOBの山本健太先生（28期生Vo）達6名の『BOOPS』によるアカベラが続きます。特にコウノドリドラマテーマ曲「あなたがここにて抱きしめることができるなら」の6声のハーモニーの美しさに皆が魅了されました。次は軽音OB・元モンキードクターズ小林英治先生（12期生Vo&Gt）から、軽



音入部後の萩田先生とのエピソードやその後の経緯をお話頂きました（3人の悪魔との契約話は爆笑かつ必聴です）。Eric Claptonの名曲「Tears in Heaven」をメロウに歌った後、同メンバー林宏先生（10期生、残念ながら欠席）作詞・曲「愛して三木町」の熱いバラードに、当時の香川医大周辺の男井間池、牛や蛙、しらさぎ舞う自然一杯の風景が皆さんの脳裏に浮かび、眼頭が熱くなったはずです…多分。（軽音OBライブDVDにフルコーラス歌詞を掲載中、入手希望者は讃樹會事務局までご連絡下さい！）

続いて佐藤清人先生（4期生Vo）から、小豆島中央病院の地域医療に向けた熱い思いをご紹介頂いた後の「Change the world」はめっちゃカッコ良かったです！東京から参加した乾政志先生（7期生Gt）には5年前まで香大に勤務していた頃、軽音部顧問を目指しておられたという「香川医大★軽音部愛」を熱く語って頂きました♪（現在の軽音部顧問は横見瀬院長です）。さらに山口真弘先生（7期生Vo.元井井先生バンド）から、学生時代の軽音部Hot Stuffでも歌ったBilly Joelの名曲「Honesty」を甘い歌声で再演頂きました。

次は光中弘毅先生（8期生Gt）のご登場です。高校生の娘さんとご友人（Cl&Alt.sax）とともにブラスバンド人気曲「宝島（ラテンバージョン）」、さらに「Sing Sing Sing」を演奏され、一同盛り上がりました！

前半部の盛り上がりはここでピークを迎えます。7期生の萩田和秀先生（Pf）、中村民江先生（Vo.昨年発売のCD「Lyrics of my heart」は超オススメ♪）、村松明子先生（Mar.愛知からマリimbaを輸送しての参加！）、政田哲也先生（Bs）によるジャズ定番曲「The Days Of Wine And Roses（酒と薔薇の日々）」とボサノヴァ「Wave」です。25年ぶりとは思えない完成度の高い演奏に、聴講者の皆さんも聴き入っていました。

さらに後半は、藤井聡先生率いるSPEAKLOWハウスバンドによるピアノトリオ演奏の後、横井徹先生（3期生Tb）達のトロンボーンW演奏、京都から山本

一夫先生（4期生Gt）によるジャズギター演奏と、夜遅くまでジャズセッションが続きました。

最後はかつてHot Stuffライブで演奏したスティービーワンダーの名曲「Isn't she lovely?」を皆で演奏し、大変盛り上がりました！その雰囲気を感じ取って頂ければ幸いです。

今回参加人数は50名以上と大盛況で、軽音OB以外にも音楽を愛するドクターにも多数ご参加頂きました。久しぶりの再会に皆が喜び合うという場面も多数見られ、香川医大（香大）軽音部というSweet Homeに再び集まり、音楽を通じて新たな経験を共有し、繋がる事が出来ました。讃樹會の濱本会長様、事務局の柚山様には本当に感謝しています。次の開催を希望する声も出ており、時期未定ですが近いうちに何か必ず開催します。音楽を愛する讃樹會OBの皆様、ぜひ香川に集まりましょう！

（次回は、小林英治先生の隠れ名曲「ノーノーノー讃岐弁」をお披露目する予定です♪）

最後になりましたが、軽音部OB一同より、故清水徹先生（2期生）、古谷保人先生（5期生）、元井浩司先生（6期生）のご冥福を深くお祈りします。



4列目 政田哲也 藤村貴志 吉田裕之 光中弘毅
 3列目 劔持直也 難波経立 岡添誉 山口真弘 田井祐爾 星川洋一 山下彩奈 松原あい 岡田真樹 藤川愛
 石川桃 ☆楠瀬正史 ☆塚原良
 2列目 横井徹 清元加代 村松明子 中村民江 佐藤清人 山本一夫 乾政志 萩田和秀 小林英治 ☆佐藤亮太
 ☆松田伊織
 1列目 ☆森脇悠利 ☆井上智之 ☆樋口雅大 ☆守家将平 ☆佐々木皓大 ☆三木佳菜恵 ☆川上真優
 注:☆は学生さんです



Album / 祝卒業 31期生 -平成28年3月24日-





卒業式～
祝賀会



謝恩会



同窓会長代理の安田真之先生から
お祝いの卒業記念品の目録贈呈



31期卒業生が選ぶ栄えある
“Outstanding Teacher”は、
坂東修二先生に



謝恩会実行委員長を務めた
水谷健佑君(右)と安田先生

編集後記

皆様、今年も近年の傾向と同様に厳しい暑さが続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。讃樹會も30年を超え、平成28年5月の讃樹會会長選により第2次濱本会長体制が発足し、新たな船出となりました。前任の中村丈洋広報局長が副会長に御就任され、後任の広報局長として初めて編集させていただきました。皆様のご協力のおかげで会報第52号を発刊することができ、心より御礼申し上げます。

本号では山田賢治先生、後藤孝也先生、中村丈洋先生、内藤宗和先生の同窓生教授就任御挨拶をいただきました。また第14回総会では、医療マンガ「コウノドリ」の主人公モデルとして御活躍中の萩田和秀先生に記念公演会とミニライブを御披露していただきました。本号で初めての企画として各地で開業されておられる先生方にも寄稿していただきました。このように様々な領域で讃樹會同窓生の御活躍を会報にてお知らせできることは大変誇らしいことです。

その他、国外留学助成金留学レポート、医学部生短期留学レポート、熊本災害ボランティア報告等国内外での活躍も目立ちます。本号に御寄稿いただきました先生方、医学部生に改めて感謝申し上げます。

微力ではございますが、さらに会員の皆様に親しんでいただける会報を目指す所存です。会員の皆様からの御意見をいただければ幸いです。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

平成28年8月 讃樹會広報局長 安田真之（平成9年卒・第12期生）

事務局からのお知らせ

【連絡・問合せ先】 TEL 087-840-2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp

◆本年の香川大学医学部医学部祭の日程は次の通りです。

平成28年10月7日（金）～9日（日）

- ◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。
- ◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人2000円の支援がありますので是非ご利用下さい。
- ◆国外留学助成金の申込は年2回です。直近の締切は本年9月末日です。次は来年3月末日となります。
- ◆学術助成金の申込締切は毎年4月末日です。ふるってご応募下さい。

参加無料

「第5回 ホームカミングデー」開催決定！

香川大学と香川大学同窓会連合会の共催で、卒業生や元教職員の方々をお招きする「第5回ホームカミングデー」を開催します！

当日は楽しいイベントとなるよう様々な企画を検討中です。詳細はHP等でお知らせして参ります。申込みは随時受け付けておりますので、お誘い合わせの上ふるってご参加ください！



2016.10.30(日) 9:30 ~ 17:00

※ご希望のイベントのみの参加も可能です。

開催場所

幸町キャンパス(主会場:オリブスクエア)・各学部(キャンパスツアー)

イベント

●学部キャンパスツアー●大学祭見学●歓迎式典●懇親パーティー 他

ただいま申し込み受付中！
お気軽にお電話下さい。
卒業生の皆様のご参加を
心よりお待ちしております!!

【お問い合わせ・申込先】

〒760-8521 香川県高松市幸町1-1

香川大学経営管理室総務グループ

TEL : 087 (832) 1017



香川大学同窓会連合会

検索

<http://www.kagawa-u.ac.jp/dosokai/>

最新情報を

HPで更新中！

診療科だより

香川大学医学部母子科学講座周産期学婦人科学

私たちの教室紹介

医局長・准教授 金西 賢治
(平成5年卒・第8期生)

私たちの教室は、教授1名、准教授2名、講師1名、助教7名(含む大学院2名)、専攻医1名、大学院生1名(学外)の総勢13名が在籍し、男女比は男性医師6名、女性医師7名と最近の産婦人科医の全国的な男女比構成を反映しているものと考えます。医局の半数は女性ですが、妊娠中や育児中のものも少なくなく、それぞれのライフスタイルに合った職場環境が維持できるよう全員で頑張っております。当講座は、昭和55年、前身である香川医科大学の開講に伴い母子科学講座という大講座制で開講され、同年の附属病院開院時から母子センターを設立し、平成17年には総合周産期母子医療センターに全国で2番目に認可されました。香川県における昨年度の周産期死亡率は全国一低い水準となりましたが、こういった高い医療レベルを維持するため、これからも地域医療に関わる産婦人科医、小児科医が密に連携できる体制を大学が中心となって維持していきたいと考えています。総合周産期母子医療センターは創設当初より、専門性の高いチーム医療を行い、出生前診断、胎児治療、周産期管理において地域の3次医療機関として機能しています。総合周産期母子センターにおけるセンター長は、周産期学婦人科学教授と小児科学教授の2年毎の交代制をとっており、産婦人科と小児科が常に連携、協力し合える環境が整っています。また、日本周産期・新生児医学会が認定している周産期(母体・胎児)専門医(Perinatal Obstetrician)は4名常勤し、高度な診療および指導体制をとることができています。最近の当院の分娩数は年間約560例にのぼり、帝王切開は緊急を合わせ年間約100例を取り扱っています。また、当教室の伝統として安全な経膈分娩管理が挙げられますが、急速遂娩術では鉗子分娩を取り入れることで、帝王切開率の低下に寄与しているものと考えます。さらに、骨盤位分娩、双胎妊娠の経膈分娩や前1回の既往帝王切開の経膈分娩も積極的に行っており、その適応を十分に検討した

うえで、安全な分娩管理を心がけています。近年、全国的に見ても帝王切開率は上昇傾向にありますが、最近では忘れられがちな産科技術を継承し、教育することで、技術的に幅広く経膈分娩を取り扱える医師の育成に努めています。産科医師の高齢化に伴う近隣開業医の廃業もあり、自然と集約化が進む香川県での地域医療の中心として、正常分娩はもとより産科救急、妊娠高血圧症候群や内科合併症を有するハイリスク妊娠の管理、超未熟児や切迫早産・多胎妊娠等の母体搬送例をほぼ全例受け入れていて、香川県における母体死亡率や周産期死亡率の改善に寄与していると考えます。また、婦人科疾患の分野でも従来の悪性腫瘍の手術件数も維持し、新たに腹腔鏡技術の取り入れも積極的に行っています。放射線科治療部門との連携では、隔週で合同カンファレンスを行い、放射線治療中の患者の治療効果の評価や治療方針の確認を行っています。月一回は病理部との合同カンファレンスも行い、まれな組織型の症例や診断が困難であった症例を挙げ、手術摘出標本の病理組織像を供覧し、全員で検討しています。臨床研究面では、周産期管理における二次元超音波診断法による胎児異常の出生前診断に加え、三次元超音波画像診断による、より正確な形態診断法の確立にむけ研究を行っています。また最近では、ライブ3D法など超音波技術の発展にあわせ、最新の画像診断を取り入れた研究を行っており、超音波オタクを自負する教授のもと、これら最新の超音波技術を用いた胎児異常の出生前診断、胎児発育の新しい評価法、胎児臓器体積計測、胎児心臓の評価および胎児行動学に関する多数の英語論文を国際雑誌に掲載し、地方大学から世界にスローガンに日々努力しています。最後に私たちの教室は大きな医局とは違い、少ない医局員全員で、香川の地域医療を支えているという気概をもち日々の臨床にあたっています。これからも様々な診療科にお世話になりながら連携し香川県の医療向上に努めてまいりたいと考えています。

